
天界の黯い獣

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天界の黯い獣

【Nコード】

N3801N

【作者名】

海土龍

【あらすじ】

天界の主にして、神々の王であるゼウス。

その娘として生を受けたエリスは、なぜか、父神の神殿から外に出ることを許されない。

だが、ある時、兄神アポロンの黄金の馬車に隠れ乗って、下界に降り立つ。

そして、英雄ペルセウスと共にメデューサ退治の旅に出た！

1. ゼウスの神殿 (前書き)

ギリシア神話をもとにしたファンタジーですが、諸説あるため、あなたの知っているギリシア神話とは異なるかもしれません

1. ゼウスの神殿

かの英雄のことを

わたしに語ってください ムーサよ

あの勇気を あの正義心を

あなた方の声で 歌ってください



不満だらけだった。

高くそびえるような城壁も、広く迷路のような庭園も、誰にどれだけ美しいと評されていようと、少女には関係ない。不満なだけだ。

父神ゼウスの神殿は、神も人も憧れ、そこでの暮らしを夢見るものだが、生憎、少女は生まれてこの方そこから一步も出たことがないときた。

憧れなどもちろん、夢見るわけがない。むしろ、飛び出たくて堪らなかった。

「ねえ、ねえってば！」

少女は目の前の逞しい太股に、めいっぱい力を込めてしがみついた。

その脚は迷惑がって暴れるが、絶対に離して堪るものか。

「やめてくれ、エリス。脱げてしまおう」

「お願いよ、アポロン兄様。ちょっとだけだから！」

少女――エリスが必死にしがみついている相手は、太陽神として人間たちに崇められているアポロンである。

人間たちが造る彫刻のように逞しい肉体を持つ彼には、幼いエリスの必死のしがみつきなどまったく苦ではないようだ。そのままズルズルと、エリスを引きずって己の歩みを進めていく。

石造りの回廊に声が響き渡る。回廊は神殿の中庭に沿うように巡らされていて、ここはエリスの部屋の真ん前にあたった。

「駄目だ。離せ、エリス」

「ちょっと乗ってみるだけ。乗ったらすぐに降りるから！」

「だーめ」

「見るだけ！ ちょっとだけ見せて！」

「駄目なものは駄目だ。馬車を見たら絶対に乗りたくなるし、乗ったら絶対に走らせたくない」

「ケチーっ！」

「ケチで結構」

兄、アポロンは取り付く島がない。

だが、エリスだって、彼に負けなくらいに諦めが悪い。

そのため、もう何百年もずっと同じやり取りを繰り返している。

エリスはどうしてもアポロンの黄金の馬車に乗りたいし、アポロンは絶対にエリスを己の馬車に乗せたくないのだ。

「ほら、離せって。日の出の時間に間に合わなくなるだろう？」

「知らない！ 絶対に離さないもん。ケチなアポロンなんて困れば

いいのよ」

「おい、こら……。そろそろいい加減にしないと、怒るぞ？」

うつ、とエリスは眉を寄せて、アポロンから手を離れた。

だが、諦めたわけではない。潤んだ瑠璃色の瞳で彼を縛り付ける。

「エリス、そんな顔にしても駄目だからな」

「怒っちゃ、いやっ！」

「怒っちゃいけないさ。だから、泣くのはやめてくれ。本当に時間がないんだ。なのに、そんな顔をしたお前を置いて行けないじゃないか」

「だって……」

ため息。アポロンはエリスに向き直って、彼女の視線に合うように膝を着いた。

「いいか、エリス？ エリスがこの神殿を出られないのは父上の命があるからだ。俺がお前を馬車に乗せないからじゃない。——分かるな？」

「うん」

そうなのだ。エリスが何があってもアポロンの馬車に乗りたいのは、馬車にさえ乗ればこの神殿から出ることができると思ったからだ。父神の神殿には、彼が張った結界に覆われている。

他の神々は自在にその結界を通り抜け神殿に出入りすることができるのだが、なぜかエリスだけは結界を越えることができなかった。だけど一度だけ、アポロンに馬車に乗せて貰い、神殿の上空を駆けたことがあった。

千年と何百年か昔の話だ。エリスはその時のことを強く覚えており、アポロンの黄金の馬車であれば父神の結界を抜けられるかもしれない。

れない、と思うようになったのだ。

再び大きなため息が頭上に降りてきた。

「父上がなぜお前を神殿に閉じ込めていらっしゃるのか、それは分からない。けれど、父上の命はこの天界において絶対だ。――分かるな？」

「うん。……でも」

不満げな表情を浮かべた異母妹の赤みを帯びた金髪を、アポロンはやや乱暴に撫で回した。

エリスの髪はひどく巻き毛で、そのつもりがなくとも、面白いほどに髪が指に絡まってくる。

アポロンは細い糸のようなエリスの髪を、その感触を楽しむように、くるくると己の指に絡めた。

「そんな顔をするな。俺を困らせても何の得にもならないぞ。――そうだ。気晴らしにペルセウスの話をしてやろう」

「ペルセウス？」

エリスの顔が明らかに変化した。

パツと瞳を輝かせてアポロンを見上げる。

「ペルセウスって？」

「父上が、アルゴス王アクリシオスの娘ダナエーに生ませた人間の子だ」

「お父様の子なの？」

「そうだ。だから、ヘラ様には内緒だぞ」

「うん、わかった。お母様には内緒ね」

父神ゼウスの正妻はエリスの母神ヘラであるが、ゼウスにはアポ

ロンの母神レトを始めとする多くの愛人がいる。

困ったことに、ゼウスの愛人は女神だけに収まらず、人間の女にまで及び、彼の子でありながら人間の生をまっとうすべき定めにある子どもは多くいるのである。

——そして、ペルセウスもまたその1人であった。

アポロンは石造りの床に無造作に腰を降ろすと、エリスを己の膝の上に乗せて、後ろから抱き込みながら話を続けた。

「アルゴス王アクリシオスは、彼の孫によって殺されるという預言を受けた。だから、孫が生まれないように一人娘であるダナエーを幽閉したんだ」

「幽閉？ 閉じ込めたってこと？」

「そう。そこに黄金の雨に変身した父上が忍び込み、結果、ダナエーはペルセウスを生んだんだ」

「ペルセウスは、アクリシオスを殺すの？ 自分のお祖父様でしよう？」

「預言が当たればな」

アポロンは他人事のように言っただけだが、そのことを預言したのは他の誰でもない、彼自身だ。

デルポイの主であるアポロンはそこを訪れた人間に対して、巫女の口を通し、神託を授ける役目を担っている。

「孫の誕生を知ったアクリシオス王は、ダナエーとペルセウスを箱に閉じ込め川に流したんだ。本当はペルセウスの息の根を止めたかったんだろうけど。……出来なかったんだ。たとえば、自分を殺す運命にあったとしても、一人娘が生んだ初孫だからな。——そして、二人を入れた箱はセリポス島に流れ着き、デュクテウスという男に拾われた」

「ダナエーとペルセウスは助けられたんだね？」

「そうだ。けど、ここでまた新たな問題が生まれた」

アポロンはエリスの耳をくすぐるように指先を動かして、彼女の笑いを誘った。

エリスはくすぐすと笑って体を小さくしながら、話の続きをせがんで、アポロンの悪戯好きな手を掴んだ。

月は疾うに西の地平線へと消え失せていた。

「デュクテウスの兄はポリデュクテスといって、セリポス島の領主なんだ。このポリデュクテスがダナエーを見初め、ペルセウスを邪魔に思うようになってしまった」

「邪魔？ どうして邪魔なの？」

「そうだなあ。エリスには分かり難い感情かもしれないが、自分の母親が父親以外の男のものになったら、嫌だと思うのが人間の男なんだ。——とにかく、ペルセウスは領主のポリデュクテスからダナエーを護っていて、ペルセウスがいる限りポリデュクテスはダナエーに手が出せない。だから、ポリデュクテスは、ペルセウスをダナエーから遠ざけることを考えたんだ」

「どうしたの？」

「ペルセウスにメデューサ退治を命じたんだよ」

「メデューサを？」

エリスは驚きの声を上げた。

メデューサといえば、ゴルゴン三姉妹の一人で、目が合った者を石に変えるという能力を持った怪物だ。

ひどく醜い容姿をしており、その頭髮は無数の毒蛇であると聞く。

そんな怪物を、ただの人間であるペルセウスが退治できるわけがない！

「ペルセウスは人間なのでしょ？ 絶対に無理よ。死んじゃう！」
「そうかもしれないな」

神である自分たちは不老不死の身だ。そうであるアポロンの答えは素っ気ない。

エリスは頬を膨らませた。

「ペルセウスもお父様の子なのでしょう？ 私たちの兄弟じゃないの」

「違う。彼は人間だ」

「でも……」

再びエリスの瞳が潤みだした。すると、その時、エリスの涙を拭うようにサツと風が横切った。

不意の音が響く。

「アポロンの兄上はエリスを泣かせて楽しいですか？」

「ヘルメス！」

風と共に現れた青年は、ヘルメスだ。

翼の生えたサンダルを履いており、空を大地と同じように駆けることができる彼は、風と共に現れただけではなく、おそらくその風に乗って現れたのだろう。

アポロンはヘルメスに向かって屈託無く笑うと、膝に乗せていた小さな体を軽々と抱き上げ、立ち上がった。

「泣きたいのはこっちだ。ヘルメス、どうにかしてくれ。こいつのせいで俺はまたアルテミスに怒られてしまう」

「そうでしょうね。日の出の時刻は疾うに過ぎてしまいましたからね。——さあ、エリス、こっちにおいで。兄上はお忙しい」

苦笑して、ヘルメスはエリスに向かって手を差し出した。エリスはその手をじっと見つめ、眉を寄せた。

ヘルメスはアポロンやエリス同様ゼウスを父に持ち、アポロンを兄と呼ぶが、二人の間柄は兄弟というよりも親友である。

だから、こんな時はいつだって、ヘルメスはエリスよりもアポロンの味方をする。

仕方なくエリスはアポロンから離れてヘルメスのその手を取った。彼の涼しげな顔を見上げる。

「ヘルメス、今ね。ペルセウスの話を聞いていたの。……ペルセウスが死んでしまう」

幼いエリスは今一番の不安を誰かに話したくて堪らなかった。気持ち分かち合いたかったのだろう。だが、ヘルメスはエリスがあっけなく思うくらいに、あっさりと即答した。

「大丈夫だよ」

「どうして？」

「神々は皆、ペルセウスを知っているからさ。ほら、アポロンの兄上でさえ彼を知っていた。それだけ皆が彼を心配しているってことだよ」

どういう意味だろうか、とエリスは小首を傾げる。

「私も心配だよ。ヘルメスも心配？」

「そうだね、心配だね」

「何か手助けって出来ないのかな？」

「さあ、どうだろう？」

ヘルメスはのりくらりとエリスの問いをかわしている。何かを知っているながら、それを隠そうとしている態度だ。

エリスは焦れた。

「私、ペリセウスのところに行ってくる！　そして、一緒にメデューサを倒すわ！」

エリスが決意したように強めた口調で言い放ち、我慢ならぬと地団駄を踏むと、ギョツとしたのはアポロンだ。

エリスの両肩を押さえつけ、駄目だ、と声を荒げた。

「父上の命を忘れたかっ」

「どうして私は地上に降りてはいけないの？　幼いから？　幼いからダメなの？　私がずっと幼い姿のままだから……？」

「どうしてというものではない。父上がお決めになったことだ」

「ひどいよ、そんなの。――だって、私とアレスは双子なのに。アレスは良くてどうして私は駄目なの？」

アレスはエリスの両親を同じくする兄だ。

しかも、アポロンとアルテミスが双子であるように、アレスとエリスも双子として生を受けた。

誰よりも、どんな存在よりも、自分に近く、等しい神である兄神で、生を受けて初めて見つけた相手はお互いであり、幼い頃はずっと手を繋いで同じように育ったエリスの片割れである。

ところが、同じ双子でもアポロンとアルテミスは共に美しく成人したが、アレスとエリスの双子は、兄のアレスのみが遅しい成長を果たし、エリスは八歳程度の年齢で成長が止まってしまった。

それは、まるでアレスがエリスの分の成長も奪ってしまったかのようだった。

これはいったいどういうことだろうと、そう思うと同時に、エリ

スがこの不公平に黙っていられるわけがなかった。

兄神アレスの姿を見つucker度に、その大きな背中に後ろから飛び付き、首に両腕を巻き付けると、その耳元で恨み辛みを浴びせてやるのだ。

そうすることでエリスの不公平がどうにかなるわけではないが、せざるを得ない心情がエリスにはある。

ところが、アレスはそんなエリスを軽々と摘み上げ、自分の良いように抱き締めると、ニカニカ笑って言うのだ。

——俺の味方はお前だけだな。

エリスの不満はちつともアレスに伝わっていない。不満は募るばかりだ。

「私だって大きくなりたかったのに」

ぐっと咽を鳴らせると、アポロンが頭を撫でてくれた。

「父上はエリスを手元において置きたいのさ。お前がとっても可愛いから」

それはつまり、父神が自分の成長を止めているということなのだろうか。

そう問い質そうとした時だった。アポロンの頬すれすれに一本の矢が飛んできた。さっと空気が冷える。

驚いて振り返ると、怒りを露わにした美女が弓を構えていた。アポロンの妹神、アルテミスである。

「アポロン！」

「待て！ 俺は悪くない！」

矢。今度もアポロンの頬を掠って飛んでいった。

「いつまで経っても太陽が昇らないと、地上の者たちが騒いでおるぞ。それでもお前は悪くないと言うのかっ」

「アルテミス！ 待て待て。お前はそうだな。怒った顔もなかなか美しいが、俺としては笑った顔の方が……」

「射る！」

ガツン、と金属音。

アポロンの胸を狙った矢が、それを防ごうとした彼の腕輪に弾き飛ばされたのだ。

「止せ、こんなところで。もしエリスに当たったらどうするつもりだ！」

そんなアポロンの悲鳴など耳には届かないのか、腰まで長く伸ばした金髪を無造作に片肩に振り払うと、アルテミスは更に弓を構えた。彼女の手の中で、ギリギリと弦が鳴る。

逃げ道はない。妹神の怒りを静める手立ても浮かばない。いよいよお終いだと悟ったアポロンは、エリスの幼い身体を自分の前に置き、盾にした。

カッとアルテミスの頬が赤らんだ。

「わたしの矢がエリスを貫くことはない！」

―― カツン ――

アルテミスが放った矢は確かにエリスの身体を傷付けなかった。その前にヘルメスが己の剣で弾いたからだ。

「姉上、どうかそのくらいに。兄上も一刻も早く地上に向かって下さい」

悔しげな最後の矢が見当違いな方向に飛んで行き、アルテミスは唇を噛みしめながら弓を降ろした。

キッと双子の片割れを睨む。

「さっさと行け。お前の馬車の準備は整っている！」

「……そうか。いつも悪いな」

空笑いが響く。呆れたようにため息を漏らしたのはアルテミスで、ヘルメスは無言で肩を竦めた。

「父上の神殿に向かったと聞いた時から予期していた。いつもいつもお前はここでエリスに掴まる」

「仕方ないだろう？ エリスは暇を持て余しているんだからさ」

「黄金の馬車と銀の馬車を駆けさせることは、我々の一番のお役目だ」

「アルテミスは、エリスの潤んだ大きな瞳を振り払って、そのお役目に向かうことができるんだな？」

「……」

眉を寄せたアルテミスに、それ見たことか、とアポロンは笑みを浮かべた。

「所詮俺たちは双子。俺もお前もあの子を放っておけないのさ」

からから笑って、アポロンは逃げるように去っていった。

残されたアルテミスはしばらく腹立だしげにその後ろ姿を見つめ

ていたが、不意にその存在を思い出したかのようにエリスに振り返った。

「さあ、エリス。今日はわたしと話でもしようではないか」

ところが、振り返った先に幼い姿はない。

サッと顔を見合わせるアルテミスとヘルメス。

「どうして目を離したんだ！」

「それは姉上も同じでしょう？」

「すぐに捜すんだ。そう遠くには行っていないか」

アルテミスは弓を持ち直し、ヘルメスとは逆の方向に駆けだした。

2. ペルセウス

アルテミスの銀の馬車は夜空をキラキラと、光の欠片を散りばめながら駆け抜ける。

対して、アポロンの黄金の馬車は、昼の時間をゆったりと費やして、東の空から西の空へと駆けた。

澄み渡った青空。黄金色の鬣を持つ馬が嘶いた。

それはアポロンの馬車を曳く四頭のうちの一头で、馬車同様眩しげな光を放っている。

エリスは目を瞬かせ、その身を包んでいる闇のマントにいつそう体を縮めて隠れた。

エリスの伯父であり、冥界の主であるハデスから貰った闇のマントは、人はもちろん神の目からも隠れることができるという品物だ。父神ゼウスはそれをエリスが持つことを嫌がり、取り上げようとしたが、その前にエリスはマントに身を包み、ゼウスから逃げた。以後使う機会に恵まれなかったため、次第にゼウスはマントの存在を忘れてしまったようだが、エリスはじっとその機会を待っていた。

アポロンの馬車の片隅でマントを頭から被り、身を潜めていたエリスは、潮の匂いを感じ取ってそっと地上の様子を見下ろした。

空よりもなお碧い海である。――エリスが生まれて初めて目にした海である。

アポロンの黄金の馬車は、エリスの推測通り、エリスを乗せて父神の結界を通り抜けた。

ついにエリスは、ゼウスの神殿から外に出ることに成功したのだ！目に映るものすべてが初めて触れるもので、エリスは興奮で今にも叫びそうになる。だけど、声を出してはいけない。エリスはぎゅ

つと唇を噛みしめて、馬車の手綱を操るアポロンの横顔をそつと窺った。

（大丈夫みたい）

どこか抜けたところのあるアポロンは少しもエリスに気付いた様子を見せない。

エリスは更に身を乗り出して地上を眺めた。思いを馳せるのは、ペルセウスのことである。

（彼はメデューサの住処を知っているのだろうか？）

不意に沸き上がった疑問に、エリスは小首を傾げる。

（セリポス島を出発した彼はまずどこに向かうだろう？）

喩えペルセウスがメデューサの住処を知っていたとしても、彼が愚か者でない限り、無謀にも直接そこに向かうようなことはしないだろう。

まずはメデューサに関する情報を集めるはずだ。その弱点は何か。どのように戦えば倒すことができるか。

人間である彼にはどんな些細な助けでも咽から手が出るほど必要であるはずだ。

エリスはヘルメスの言葉を思い出した。

——神々は皆、ペルセウスを知っているからさ。ほら、アポロンの兄上でさえ彼を知っていた。それだけ皆が彼を心配しているってことだよ。

アポロンはペルセウスを知っていたが、彼に力を貸す気はない様

子だった。

（では、ペルセウスを一番案じ、彼に力を貸そうとする神は、誰？）

灰色の乾いた大地が碧い海の上に盛るように見えた。風が吹き、砂埃が舞う。

砂世界の中に白く輝く神殿が見えた。――パルテノン神殿だ。

その主の気高い姿を思い出してエリスは、そうか、と思う。

後は居ても立ってもいられなくなって、馬車から足を降ろし、えいっとばかりに飛び降りた。

馬車から地上まで、気が遠くなるほどの距離がある。だけど、エリスは天界の主の子であり、女神である。どさり、と小さな音を立てて尻から着地した。

そして、何事も無かったかのように立ち上がり、尻の砂を手で叩いて払った。

踏み締める砂は柔らかく、足にまとわりつくような大地だ。

大気はカラリとしており、肌が焼けるように日差しが強い。

灰色の大地に大きな黒い影が落ちている。まるで人が笑った時の口のように見えて、エリスは胸を、どきりと跳ねさせ、勢いよく振り返った。

それは神殿を囲うように建つ幾つもの柱の影だった。

正面の石階段を上がると、その円柱の柱に手が届く。細やかな装飾のされたそれは、ゼウスの神殿の物にも引けを取らない。

エリスは足音を忍ばせて神殿の中へと歩みを進めた。

だが、すぐにその足を止めることになる。女性にしては低い声が響いて聞こえたからだ。

エリスは柱の影に隠れると、そっと声の方を窺った。

「勇気ある者よ。あなたにわたしの盾を貸しましょう」

その声がパルテノン神殿の主――アテナのものであることはすぐに分かった。

アテナは常に武装しており、頭には兜を、胴には鎧、右手には槍、左手には盾を持っている。

そして、まさに今、彼女は目の前に跪く少年に己の盾を差し出していた。

「なんて美しい盾だろう」

青年が盾を受け取ると、盾はキラリと眩い光を放った。

一点の曇りもない鏡のように磨かれた青銅の盾。以前ゼウスがアテナに贈った物だ。

「それはアイギスの盾。この世に二つしかない品物です。一つは我が父ゼウスが持ち、もう一つがそれ。その盾です。――しかし、その盾は未だ完成されていません」
「完成されていない？」

驚きの声が響く。柱の影のエリスも驚いて、アテナを仰ぎ見た。
気高く美しいアテナの表情が陰しくなる。

「盾の中央を見なさい。そこに飾るべきものを飾り初めてその盾は完成するのです」

「飾るべきもの？ それは？」

「メデューサの首です」

青年は息を呑んだ。アテナと盾を交互に見やる。

「メデューサの首をここに？」

「そうです。あの憎むべき女の首をこの盾に括り付けてやるのです。」

——さあ、行きなさい。ペルセウスよ。わたしの盾に誓うのです。必ずメデューサを倒す、と。そして、その首をわたしに捧げなさい」

低く響いた声はどこか冷たく、否を言わせる隙を持たない。

青年——ペルセウスはアテナの盾を抱えると、一礼し、彼女に背を向けた。

次の地へと歩み出さざるを得なくなっている。ペルセウスはアテナの気迫に押されるようにしてパルテノン神殿を後にした。

一人砂地に行くペルセウスの後を追っていたエリスが、彼の前に姿を現せたのはその時だ。

神殿が遠く小さくなったのを確認して、闇のマントを脱ぐ。

「ねえ！」

「うわっ！」

ペルセウスは突如として目の前に現れた幼い少女に、思わず大声を上げて驚いた。

「しっ。見つかるマズイの」

「君は誰？ いったいいつの間に……。見つかるって？」

「アテナのお姉様によ。なぜか私はお姉様に覚えがめでたくないの。見つかったら即お父様のところに連れ戻されてしまう。——せっかく神殿から抜け出してきたのに、もうお終いつてことになったら、つまらないわ」

「神殿から抜け出してきたって？ 君は巫女なのか？」

「巫女？ 違うわ」

エリスは小首を傾げる。どうもペルセウスは自分のことをちっとも分かっていない様子だ。

だが、それは致し方がないことだ。エリスはアポロンから話を聞

いてペルセウスのことを知っているが、ペルセウスは誰からもエリスについて話を聞かされていないのだから。

エリスは思い直してペルセウスに名乗ることを決めた。

「私の名前はエリス。あなたとは……そうね、異母兄妹ってとこよ」

「異母兄妹？」

「だって、あなた、お父様の子どもでしょう？」

エリスが言うと、ペルセウスはムツとした表情になった。

「俺に父親なんていない。母さんは一人で俺を生んだんだ」

「知っているわ。あなたのお祖父様があなたのお母様を幽閉していたのよね？ そんな場所に入入りできるのはお父様しかないわ。」

「——そうでしょう？」

確かにペルセウスの母は、アポロンの予言を信じた祖父の手によって、青銅で作られた部屋に閉じ込められ、男が近付けないようにされていた。

ペルセウスは怪訝な顔でエリスを見つめた。値踏みするかのよう
に、頭のとっぺんから爪先まで順繰りに見回す。

ちっぽけな少女だ。赤みを帯びた金髪は砂にまみれ、頬も薄汚れている。

身に纏っている物は、キトン一枚のみ。それも男子用のキトンであるらしく、丈が膝までしかない。

更にその下に目をやったペルセウスは驚く。少女は素足だった。

「君、何者なんだ？」

建物内や整備された街中の路であるのならば素足であっても何ら疑問は湧かない。

だが、ここは、砂に紛れた堅く鋭い石があちらこちらに散った大地だ。長旅を覚悟したペルセウスはもちろんサンダルを履いている。このような場所を素足で歩いているということは、履物さえも買うことのできない貧しい者か、もしくは、履くことを許されていない奴隷ということになる。

ペルセウスはますます怪しんでエリスを見やった。エリスは小首を傾げる。

「だから、エリスよ。――あなたを助けに来たの」

「なんだって？」

「だって、あなた、どうやってメデューサを倒すつもりなの？」

「それは……」

言い淀んだペルセウスにエリスはしたりと笑みを浮かべる。

「それを聞きにお姉様の神殿にやって来たのでしょうか？ でも、お姉様は盾を下さっただけ。盾だけではメデューサは倒せないわよ？

――第一、あなた、メデューサがどこにいるのか、知っているのか？」

いや、とペルセウスは頭を左右に振る。そして、疑わしげにエリスを見下ろす。

「君は知っているのか？」

「ええ、もちろん」

ゼウスの神殿から出ることを許されていないエリスは、ひどく時間を持て余している。

彼女の退屈が頂点に達すると、ゼウスはエリスのために客を呼び、訪れた客はエリスの話し相手を務めるよう、ゼウスに命じられるの

だ。

そのためエリスは様々なことを知っている。

自慢げに小さな胸を反らすと、エリスはペルセウスに向かって人差し指を突き立てた。

「私も一緒に連れて行ってくれると言うのなら、教えてあげるわよ？」

3. 恐怖の記憶

暗い。——そう、闇よりもお。

夢を見ているのだと、エリスには分かっていた。

滅多に見ることのないエリスの夢は、決まって黒に包まれていて、藻掻き苦しむくらいの恐怖に溢れていた。

今、見ている夢もそうだ。底無し沼に引きずられて行くような、果てしない恐怖がエリスを襲う。

早く目覚めたい。そう思うが、エリスには、この悪夢から逃れる術を持っていなかった。

——暗い。

その深い闇に、ここはハデスの神殿に繋がっているのかと問えば、偉大なる父神は違うと答えた。

では、ここはどこなのだろうか。

父神の神殿のどこかであることは間違いないはずだ。エリスはそこから出ることを許されていない。

だが、誰もが羨む、光り輝く父神の神殿の内だとは、到底信じられない恐怖に満ちた低い呻き声があちらこちらに反響して聞こえる。エリスは父神に促されて、大人がやっとひとり通れるくらいの狭い階段を降り進んだ。

下に降りれば降りるほど更に暗黒は濃さを増して、エリスは父神の手を固く握り直した。

醜い呻き声が、大気を切り裂くように、一段と大きく響く。

「お父様、あの声は何？」

「怖いのかい？」

「うん」

「そうだな、怖いな」

「あの声は誰のものなの？」

「気になるのかい？」

「うん」

「そうか、気になるのか」

暗さがゼウスの表情を隠している。エリスは口を閉ざした。

階段を下り終えて、真っ直ぐ奥へと伸びる石造りの地下路を歩み進む。どうやら声はその奥から聞こえてくるようだ。

どのくらい歩いただろうか。不意に、カツンと足音が変わった。

視線を下に向けると、そこからは鉛の床になっている。更に目をやれば、両壁も鉛だ。

エリスは父神と繋いだ手に汗が吹き出してくるのを感じた。

嫌な汗だ。だが、エリスは父神にそれを伝えることを耐え、唇を噛みしめた。

更に歩き進むと、ポツリと灯りが見えて、ついに最奥に達したことをエリスは知った。

突き当たったそこは部屋になっているようだ。

鉛でできた扉がある。呻き声は扉の向こう側から聞こえてくる。

「扉の向こうに誰がいるの？」

「誰かいると思うかい？」

「だって声が聞こえたよ？」

「そうかい？ それなら確かめてみよう」

言うと、父神は壁に掛けられた松明を手にとった。

松明の灯りを頼りに、父神が扉の鍵を開ける。

ガチャンと大きな悲鳴を上げて鉛の扉が開いた。

エリスが部屋の中に視線を向けると、そこは谷底を覗き込んだようだった。

「さあ、よく見てごらん」

父神は松明を手にした腕を部屋の中に差し入れた。ふわりと部屋が明らみ、その狭さを露わにする。

エリスはもう一度、部屋の中を覗き込んだ。

部屋の広さは、小さなエリスが寝転び両腕両足をいっぱい伸ばした程度しかない。

そして、何もない。家具も窓も無く、人の気配も無かった。

「どうして誰もいないの？」

「誰もいないからだよ」

「でも、声が」

「聞こえたのかい？」

「うん、聞こえたよ」

「今も？」

「ううん、今は聞こえない」

首を振ると、闇の中で父神が微笑んだように見えた。エリスは小首を傾げる。

「この部屋は誰の部屋なの？」

「誰のだと思うかい？」

「分からないよ」

「君のだよ、エリス」

「え。私の？」

エリスは父神を見上げた。父神は目を細める。

「この部屋は気に入らないかい？」

「気に入ると思う？」

「嫌いかい？」

「嫌いだよ」

「そうか、嫌いか。——それなら、けして悪さをしてはいけないよ」

「悪さ？」

「そう。悪いことをしたら、君をこの部屋に閉じ込めてしまうからね」

「イヤだよ！」

信じられないとエリスは悲鳴を上げた。

こんな暗くて狭い部屋に閉じ込められるなんて考えられない！

——なんて残酷なことを言うのだろうか？

絶対に嫌だと、潤んだ瞳で父神を仰ぎ見る。すると、父神は口元に笑みを浮かべてエリスを見下ろした。

「わたしの言うことをよく聞いて、けしてわたしに逆らってはいけない。分かったね？」

「うん」

エリスは深く頷いて、ぎゅっと父神の手にしがみついた。

その時、エリスにとって父神は圧倒的で絶対的な存在だった。



ハッとして、大きく目を見開く。

目の前にペルセウスの顔があり、エリスは思わず飛び退いた。

「何!？」

「君こそ何だよ。さっきから呼んでいるのに」

「呼んでいた? ——そう? 聞こえなかったわ」

「こんな近くにいるのに?」

「考え事をしていたの。ものすごく恐ろしいことを思い出していたのよ」

「恐ろしいこと?」

エリスは両腕で己を抱き締めて、ぶるぶると震えた。

「恐ろしすぎて口にできない」

どうして、今の今まで、自分は、そのことを忘れていられたのだろうか。

それは途轍もなく恐ろしいことだというのに!

きっと、それは、エリスが長いこと『良い子』でいられたからだ。だから、恐ろしい思いをせずに済んでいて、ゼウスが闇のマントの存在を忘れているように、エリスも鉛の部屋が存在を忘れてしまっていたのだ。

——お父様に知られたら、あの鉛の部屋に入れられてしまう。

ゼウスはエリスに甘い。

エリスがどんな悪戯をしても許して貰えたし、エリスが願えば、あらゆる無理も叶えてくれた。

だが、エリスがどんなに請うてもけして叶えてくれないことがある。

それは、神殿から出ることだ。

なぜだか分からない。だけど、間違いなく、ゼウスは何が何でもエリスを神殿から出したくないのだ。

だから、ゼウスにとって『悪さ』とは『エリスが神殿から出る』ことであり、『良い子』とは『神殿で大人しくしているエリス』のことなのだ。

——神殿から抜け出したことが知られる前に、神殿に戻らないと。

唐突に思い出した昔の出来事は、まるでエリスへの警告のようだった。

ここに来て初めて、エリスの胸に焦りが生じた。早く帰らなければ、と。

だが、まだ帰りたくはない。

エリスはちらりとペルセウスを見やって、その肩に担いだ盾を眺める。

——せめて、ペルセウスがメデューサを倒すところを見届けるまでは帰りたくない！

エリスは、鏡のように磨かれた盾に、そっと手を伸ばした。触れると、ひんやりとした感触が手に伝わってくる。

「ねえ、知っている？　メデューサと目を合わせたら石になってしまうの。だけど、鏡越しなら大丈夫なんですって」

「それは本当か？」

「うん。……たぶん」

振り返ったペルセウスに、エリスは曖昧に頷く。

聞いた話なので、確かなことはエリスにも分からない。

だが、ペルセウスに鏡のような盾をくれたアテナも、その話を聞

いていたのだろう。

そして、アテナはその話が真実だと知っていたのだ。

「だから、アテナお姉様はその盾を貸して下さったのだと思うわ」
「この盾を鏡の代わりにしろと？」

「うん」

身を乗り出せば、青銅の盾にエリスの得意げな顔が映り込んだ。
これならば鏡のようにメデューサの姿を映すことだろう。

「ね？　　少しだけ倒せそうな気になってきたでしょう？　　私のおか
げよね？」

先に立って歩き出したエリスを、苦笑を漏らしながらペルセウス
が呼び止めた。

何事だろうかと振り返ると、ペルセウスはエリスの前で膝を着い
た。

そして、エリスの小さな足を己の太股の上に乗せる。

「何？」

「裸足のままだと怪我をするだろう？　　今の話のお礼をしてやる」
「礼？」

怪訝そうに眉を寄せると、ペルセウスは荷物から白い布を取り出
し、それをエリスの足に巻きつけた。靴代わりにしようというのだ。
布は膨ら脛まで巻かれ、更にその上を紐でぐるぐると巻かれ、布
の両端を固く結ばれる。

ペルセウスがエリスから体を離すと、エリスは足に巻かれた布を
不思議そうに眺めた。

「窮屈だわ。それに、歩きにくくなったわ」

「尖った石で足を切るよりは良いだろ？」

「そう？」

「それにしても、君……」

ペルセウスはエリスの足に布を巻きながら、その足の白さに驚いていた。

まるで陶器のように白く、滑らかで、素足で駆け回っていたくせに傷一つない。

そこらの貴族よりもよほど綺麗だ。

これほどの綺麗な肌を保つためには、念入りに手入れをしなければならぬだろう。

彼女が多くの侍女に囲まれた暮らしを送っているだろうことは、容易に予想できた。

ペルセウスは改めてエリスをまじまじと見つめる。

「君、本当に何者なんだ？」

奴隷かと疑った次には、貴族の姫君なのではないかと疑う。ペルセウスにはエリスの正体がまるで掴めなかった。

にっこりと笑顔を見せたエリスに、ペルセウスの眉が歪む。

だから私は女神なのよ、と冗談のようなことを言うエリスの顔を一瞥すると、ペルセウスはエリスの足に視線を落とした。

それから、エリスの布靴のできに満足して、ペルセウスはエリスの足を己の膝から降ろすと、ゆっくりと立ち上がった。

膝についた砂を手で叩いて落とす。

「それで、メデューサはどこにいるんだ？」

「大海の果てよ。オケアノスという場所にメデューサの住処があるわ。――メデューサには二人の姉がいるの。ステンノとエウリュア

レよ。この二人もオケアノスに住処を持っていて、三人はとても仲の良い姉妹なの」

「つまり、三人を相手にしなければならんってことか？」

「違うわ。メデューサは退治できるけれど、ステンノとエウリュアレは不死。――死なないの」

だから、倒すことは不可能なのだトエリスは言った。

ペルセウスはわずかに考え込み、それから口を開いた。

「要するに、メデューサが一人にいる時を狙い、そして、ステンノとエウリュアレが駆け付けてくる前に逃げられればいいわけだな？」
「ステンノとエウリュアレは、たぶん、ものすごく早く駆け付けてくと思うわ。だから、彼女たちがやって来ても無事に逃げられるようであれば駄目よ」

だけど、人間の力では怪物たちの素早さに勝てるはずがない。
零すように、エリスは静かに言葉を放った。

「――あなたにはもっと力を貸してくれる神が必要みたいね」

アテナから貰った青銅の盾。身を守る術は得た。
ならば、次に必要なのは武器だ。

エリスはペルセウスの腰に下がったナイフを見やった。

到底それではメデューサに傷を負わせることはできないだろう。
両手を握り締めて、エリスは地団駄を踏んだ。

「お姉様ってケチね！ 盾だけではなくて剣も貸してくださいさえいいのに！――だいたいくれるわけではなく、貸すっていう時点でケチよね？」

同意を求められてペルセウスは苦笑した。
エリスは口惜しげに続ける。

「お姉様はね、昔メデューサにご自分の神殿を汚されたことがあるの。そのことをずっと怒っていらして、だから、メデューサを退治すると言うあなたに力を貸したのよ」

彼女はメデューサに対して、私怨があるのだ。
それならば、もっとペルセウスに協力的になってくれてもいいものを。

エリスは、もはや影すら見えないパルテノン神殿の方を振り返った。

今から戻って武器を強請ろうか。

いや、それはできない。神という存在は、そのように甘いものではない。

一度、先に踏み出したのなら、後戻りは許されないのだ。

そのことを、エリス以上にペルセウスは承知している様子だった。

「前に進むしかない」

「そうね。オケアノスが大海の果てだと言うのなら、まずは海を目指しましょ」

前途多難である。

それでも、ペルセウスは笑顔を浮かべてエリスの肩を軽く叩いた。
これではどちらがどちらを励ますために相手の側にいるのか分からない。

エリスは力を込めて砂の大地を踏みしめた。

4. 翼の生えたサンダル

朱を残して、アポロンの馬車は西の地平線へと消えた。

それを確認してから、エリスは東の空を振り返る。アルテミスの馬車は、まだ、ない。

碧のざわめきが聞こえる。押し寄せては引いていく波に目を奪われ、二人は歩みを止めた。

キラリキラリと、朱い欠片が散っては集まり、そして、流れていく。再び空を仰げば、先程より藍が濃くなっていた。直に夜が来る。

「船を探そう」

「でも、オケアノスに向かう船なんてないわ。怪物の住処であるオケアノスに行きたいと思う人間なんていないもの」

「それなら、漁師から舟を借りよう」

「あなた、舟を漕げるの？」

「母さんと俺を救ってくれた人は漁師だったんだ」

「デュクテウス？」

エリスが言うと、ペルセウスは目を大きくする。

「なぜそれを？」

「お兄様から聞いたのよ」

「なぜ君の兄さんは俺たちのことを知っているんだ？」

驚いた表情のまま問うてきたペルセウスに、エリスは得意顔になった。

小さな胸を大きく反らす。

「お兄様は昼間起きた出来事なら大抵知っているの。あなたたち親子の入った箱が拾われたのは昼間だったのでしょうか？　だから、お兄様は知っているのよ」

「……だけど」

エリスは当然のことのように言ったが、ペルセウスには納得できなかった。

そもそも、自分たちが入った箱が拾われた時刻など、当事者でありながら、当時、幼すぎた自分の知らぬことである。

それを、なぜエリスが知っているのだろうか。

ペルセウスが怪訝な目をエリスに向けると、彼女は、そんなことよりも、と話を続けた。

「デュクテウスはポリデュクテスの弟なのでしょう？　ポリデュクテスは領主なのに、その弟がなぜ漁師なんてやっているの？」

「確かに、デュクテウスはポリデュクテスの弟で、ポリデュクテスは領主だが……」

ペルセウスの眉間に皺が寄る。

そこまで知っていながら、こんな質問をしてくるエリスが分からないかった。

すると、エリスはペルセウスの怪訝顔に気が付いて、再び当然のことのように言う。

「夜に起きたことは、お兄様は知らないの。人間の大概のことは昼間に起きるものだけど、やましい心のある人間は夜に事を起こすものなんだって、お姉様はよくおっしゃるわ。夜に起きたことで、お姉様の知らないことは無いのだけど、お姉様は夜に起きたこと、あまり私に話してくださらないの」

ペルセウスにはエリスの言っていることが半分も理解できなかった。だが、考えてみれば、やましい心を持つ人間は夜に事を起こすものなのかもしれない。

眩しく照る太陽に見守られた昼間は、彼らにとって居心地が悪いものなのだろう。

すると、ポリデュクテスが弟を領主の屋敷から追い出したのも夜のことだったに違いない。

そう、エリスに告げると、彼女は小首を傾げた。

「追い出したの？ ポリデュクテスがデュクテウスを？ なぜ？」

「自分の地位を脅かされると思ったからだ。デュクテウスは人当たりも穏やかで、皆から好かれている。対して、ポリデュクテスは傲慢で強欲、そのくせ小心者だから、疑い深い」

「ポリデュクテスは、デュクテウスが自分から領主の座を奪おうとしているんじゃないかって疑っているの？」

ペルセウスは頷いた。

「デュクテウスが漁師をやっているのはそういうわけなんだ。彼が漁師で甘んじている限り、ポリデュクテスは安心して、デュクテウスの命を狙おうなんて気は起こさない」

「そう……。そういうわけなのね」

口を閉ざしたエリスの瞳が海の碧を受けて、鮮やかに輝く。

生まれて初めて人間の醜い心を知ったとばかりに瞳を曇らせるエリスに、ペルセウスは腕を伸ばして、彼女の頭をくしゃりと撫でた。

「行こう。きっとあそこが漁師の家だ」

海岸近くに建てられた石造りの小さな家。扉の脇には古ぼけた大き

な瓶が置いてある。

歩み寄ると、潮風に晒され続けた壁はボロボロに崩れかかっていた。ペルセウスは親しみを込めた声音で、その扉を開いた。

彼の言う通り、そこは漁師の家だった。

壮年の漁師が一人で暮しており、二人を快く家に招き入れる。一晩の寝床も提供してくれるという。

漁師が言うには、日が落ちてから舟を出すなど気が知れないのとことだ。

ただでさえ行き先は、怪物の住まうオケアノスなのだ。

太陽に見守られた航海の方が良いに決まっていた。

翌朝、ペルセウスとエリスは再び海と対峙した。

漁師が貸してくれた舟を見下ろして、二人は顔を合わせた。

人の良い漁師だったが、漁師が舟を手放しては仕事にならない。

もはや不要となった舟ならばと言われて借りた舟は、傷みが激しく、嵐にあったら一刻のうちに転覆してしまいそうだ。

エリスは小首を傾げた。

「本当にこの舟で行くの？」

「舟はやめた方がいいよ」

涼しげな声は背後から聞こえた。

ペルセウスではない。彼はエリスのすぐ隣にいる。

——では、いったい誰？

パツと振り返って、エリスは顔を引きつらせた。

細身の青年が両腕を組んでそこにたたずんでいた。ヘルメスだ。

「今ごろそれを被っても遅いよ、エリス」

闇のマントを握り締めて、ぎくりとする。

改めて振り返り、彼の表情を仰ぎ見た。

さほど怒りの色は見えない。即エリスを連れ帰るつもりもない様子だ。

ホッと胸を撫で下ろし、ヘルメスに問う。

「どうして舟はやめた方がいいの？」

「以前、話したことがあるよね？　メデューサはポセイドンの愛人なんだ。メデューサ退治を公言しているペルセウスが海の道を通ると知ったら、ポセイドンはどうすると思う？」

「私が彼なら、嵐を起こすわ。メデューサを守るためにね」
「つまりそういうことだよ」

エリスは両手を腰に当てて、膨れ面をする。

「それなら、どうやってオケアノスに行つて言うの？」

ペルセウスも隣で眉を寄せている。

舟で海に出ればポセイドンに知られる。

ポセイドンに知られれば舟を沈められてしまう。

オケアノスは大海の果て。そこへ行くには海を進んでいくしかない。

――海を進んで行くしかない？

はっとペルセウスが顔を上げた。

彼の視線の先には空を自由に駆けることのできるヘルメスいる。

なぜヘルメスは空を駆けられるのか。

その理由は至極簡単だ。彼は翼の生えたサンダルを履いているからだ。

「先ほど、海の道とおっしゃいましたよね？　オケアノスへの道は、海以外にもあると言うことですか？」

「その通り。そして君は既にその道がどのような道であるか気が付

いているね？」

知を尊ぶヘルメスは賢い人間が好きだ。

どうやら彼はペルセウスのことを気に入った様子である。

ペルセウスは頷き、澄んだ声で言い放った。

「あなたのように空を駆けることができれば、オケアノスまで行くことができます」

ヘルメスは微笑み、懷からサンダルを取り出した。彼が履いているのと同じ、翼の生えたサンダルだ。

「これを君に」

「ありがとうございます」

さっそく受け取り、ペルセウスはそれを履いてみる。軽く地を蹴ると、ふわりと体が浮かんた。

「すごい」

素直に出てきた感嘆の言葉に、ヘルメスはますます気を良くした様子だ。

腰に下げた剣を引き抜くと、ペルセウスに差し出した。

「これは？」

「あるお方から、君に」

エリスはペルセウスの手元を覗き込んで小首を傾げる。

鎌のように曲線を描いたその剣は、これまでエリスが見知ってきた剣とは大きく形を違えている。

「不思議な剣だね」

「ハルパー（鎌剣）だよ。内側に刃がついているから、鎌のように引っかけて、引き切るんだ」

「メデューサの首を？」

「そう。メデューサの首を。――ペルセウス、君の成功を祈っている」

言ってヘルメスは空に舞い上がる。

エリスは驚いて彼を追った。

「私は？ てっきり連れ戻しに来たのかと思ったのに」

「そうだね。連れ戻しに来たんだよ。――でも、他にもいろいろとやらなくてはならないことがあるんだ。先にそちらを済ませてから改めて迎えに来るよ」

「じゃあ、もうしばらく地上にいてもいいの？」

ヘルメスは空を仰いだ。

空を駆けるアポロンの黄金の馬車に目を細めた。

「アポロンの兄上とアルテミスの姉上が君を捜している。僕が迎えに来るまでにあのお二人に見つかってしまったら、君はその時点ですぐに天界に戻らなければならないよ」

「わかったわ」

エリスが頷くと、サツと風が吹き抜けていった。

風はヘルメスを連れ去る。

あっという間に見えなくなったその姿をしばらく見送ってから、エリスはペルセウスに振り返った。

彼は早くもサンダルのかき方を会得したようで、思うままに空を移

動している。

エリスの頭上を一巡りすると、ペルセウスは降りて来て、やや困ったような表情をした。

エリスは小首を傾げる。

「どうかしたの？」

「俺はこのサンダルで空の道を行けるけれど、君はどうするのだろうかと思って」

「私の心配をしてくれるの？　ありがとう。――でも、大丈夫よ。私には翼があるから」

エリスはふわりと両腕を広げた。

すると、その背中に鳥のような翼が大きく広がった。

赤みを帯びた白い翼。まるで血が滲んでいるようだ。――そう、感想を漏らしたのは、確かアテナだった。

けれど、アレスは綺麗だと誉めてくれた。

（果たしてペルセウスはどちらだろう？）

エリスがひょいっと彼の顔を覗き込むと、ペルセウスは目を見開き、言葉を失っていた。

仕方がない。ペルセウスは未だもって尚、エリスを人間だと思っていたのだから。

バサリ、バサリと、わざと音を立てて翼を羽ばたかせてみせると、ようやくペルセウスは我に返ったようだ。

エリスの翼を指差して言う。

「君、人間じゃなかったのか」
「そうよ」

何てことないようにあつさりと答えると、ペルセウスは落ち着きを取り戻して、更に問う。

「アテナのことを、君はお姉様と呼んでいたよな？」

「ええ、呼んでいるわ」

「君のお兄さんは、誰？」

「さっきのヘルメスも一応、兄よ。——でも、私がお兄様と呼んでいるのは、アポロンお兄様とヘパイストスお兄様くらいよ」

「太陽神が兄？ それなら君の父親は……」

ペルセウスの言わんとしていることに気付いて、エリスはにっこりとする。

「私のお父様は、天空の主。そして、あなたのお父様も。——私たちのお父様の名前は、ゼウス。神々の長たる神」

「まさか、そんな……」

容易には信じないペルセウスにムツとなって、エリスは両手を腰に当てる。

羽ばたいて空に浮かぶと、彼と視線を等しくした。

「では、どうやって、あなたのお父様はあなたのお母様が閉じ込められていた青銅の部屋に忍び込んだの？ ——私は知っているわ。

お父様はね、黄金の雨に姿を変えて、その部屋に忍び込んだのよ」

「俺は、母さんが一人で俺を生んでくれたものだと思っていた」

「父親無しに？ ——そんなことができる人間なんていないわ」

愕然となったペルセウスの両足が地面に着く。

エリスはペルセウスを見下ろして、彼の次の言葉をじっと待った。深い迷いの後、静かに響く。

「俺は神の子だったのか……」

5. オケアノス

足下に広がる碧。

波はまるで意志を持っているかのように、ペルセウスに向かって手を伸ばす。

波はポセイドンの支配下にある。

しかし、まだ、ポセイドンに知られたわけではない。

波は波だ。波がペルセウスを捕らえようとしているだなんて、気のせいに違いない。

海の唸り声を聞きながら、ペルセウスは空を駆けた。

エリスは彼のすぐ脇を飛んでいる。ふと、彼がエリスに振り返った。

「メデューサは海洋の主の愛人だと言ったよな？」

「言ったわ。メデューサはポセイドンの愛人よ」

「メデューサは怪物なの？」

エリスはけらけら笑った。

「ポセイドンの趣味が悪いって言いたいよね？ 違うわ。メデューサはその昔、とても美しい少女だったと聞いているもの。特にその金髪は女神たちも羨むほどで、ポセイドンが彼女を見初めたのは必然だったのよ」

「信じられない。メデューサが美しかったなんて。それなら、どうして醜い怪物になってしまったんだ？」

「聞いた話によると、メデューサはポセイドンの愛を受けて気を強くしたみたいなの。自分の美しさを自慢してこう言ったらしいわ」

——私の髪は女神たちよりも美しい。ほら御覧なさいよ。アテナは常に兜を被っているわ。自分の髪に自信がないのね。

「そして、彼女はあろうことかお姉様の神殿を汚したの」

矜持の高いアテナの怒りは烈火の如く。大気までも灰にした。

「お姉様はメデューサの自慢の髪を蛇にしてしまった。——怪物にされてしまった妹を想い、アテナに抗議したメデューサの姉二人もこの時に怪物にされてしまったわ」

「そうだったのか」

アテナによって怪物にされてしまった、かつて美しい少女であったメデューサ。

口にはしないが、ペルセウスはアテナを恐ろしく思う。

己の美を貶し、あざ笑い、聖なる神殿でポセイドンと交わった女。それを許せない気持ちは分からないでもないが、醜い怪物にしてしまっただろうか。

やがて、ペルセウスの目前に陸地が見えてきた。さほど大きくもない島だ。

南側は木々が茂り、小さな森をつくっているが、東側と西側は崖、北側は砂地となっている。

二人は姿を隠すことのできる森の中へと足を踏み入れた。

薄暗い森の奥。泉を見つけて、ペルセウスは一息入れようと言った。エリスは頷く。

泉に近寄って、ペルセウスは眉を顰めた。

「この水、飲めるかな？」

「どうして、そう思うの？」

「一見きれいに見えるけど、毒なんて入っていたりしないよな？」

――ほら、この島にはメデューサの住処があるから」

エリスは泉から水を手ですくい上げると、口の中に含んだ。

咽を鳴らして、にっこり微笑む。

「大丈夫だよ。毒なんて入っているわけがないもの。――だってね、地上のすべての水はこの泉から分かれているの。ここから湧き出て、地下に潜る。そして再びどこかの地で湧き出て、流れていくのよ」

――つまり、オケアノスの水が毒に犯されれば、地上すべての水が毒に犯されるということだ。

そのようなこと、神々が許すはずがない。特に、泉の守護神でもあるポセイドンが。

そして、怪物と呼ばれる者たちもオケアノスの水だけは手を出さない。自分たちが口にする水さえも失われてしまうからだ。

安堵して、ペルセウスは泉の水に右手を差し入れた。

ひんやりと冷たい。口に運ぶと、サラサラと咽を通った。

口元を拭った時、視界の端でヒラヒラと揺らぐものに気付いた。

振り返ると、湿った大地から白い手がにゅうつと突き出ていた。

驚いてエリスの腕を掴む。

眉を寄せてエリスが振り返ると、その手は肘まで突き出して、おいで、おいで、と前後に動いていた。

「何かしら？」

「怪物か？」

「悪い感じはしないわ。行ってみましょう」

歩み寄ると、腕の根もとに顔を見つけた。

女の顔だ。ただし、土を盛り上げて作ったような顔なので、美醜は分からない。

ザラザラした土色の肌に、目らしい物と口らしい物、鼻らしい物がついている。

エリスは膝を着き、女の顔に話しかけた。

「あなたは誰？ 私を呼んだ？」

「わたしは冥府の主に遣わされた者。主からあなたに贈り物を届けるよう頼まれました」

「ハデスから？」

冥府の主と呼ばれる者は、ゼウスやポセイドンの兄ハデスしかない。

聞き返したエリスの目の前に、もう一本の腕が突き出てきた。その手には何かがしっかりと握られている。

受け取ってから、エリスは小首を傾げた。どうやら袋のようだ。

「これは？」

「キビシスです。メデューサの首は死後も見る者を石と化す魔力を持っています。誤ってそれを見ることのないように、キビシスの中に封じると良いでしょう」

「この袋の中に入れておけば大丈夫なの？」

「はい。キビシス以外にメデューサの首を入れておける物はありません」

「そうなんだ」

エリスはキビシスをペルセウスに手渡した。

彼は神妙な顔付きでそれを眺め、そうしてから懷に仕舞った。

「――それから、エリス様」

呼ばれて大地に目を向けると、用の済んだ白い腕は土に潜ったが、女の顔だけがまだ物言いたげにそこにあった。

「何？ まだ何かあるの？」

「メデューサは身籠もっています」

「それは、お腹に子どもがいるってこと？」

「はい。――その子の父親は、海洋の主。彼女は人間であった時分にその子を身籠もり、身籠もっている最中に怪物になってしまったため、出産できずにいるのです」

「身籠もっている時に怪物になると、出産できないものなの？」

怪物が怪物を生んだという話は耳にしたことがある。

だから、怪物が子どもを生めないということはないのだろう。

だが、メデューサは何百年もの間、腹に子を宿したまま月日を送っているのだという。

「メデューサを退治すれば、その子が生まれ出てくるかもしれまん」

くれぐれも気を付けるようにと言い残し、女の顔は大地の中へと潜っていった。

十分に見送ってから、エリスは立ち上がった。森の終わりを見つめる。

メデューサの住処は西の崖と北の砂地の狭間。――奥深い洞窟だ。

「メデューサが妊婦だと言うのなら、たっぷりと睡眠を取るはずよ。子どもを身籠もっている女は眠たいものなんだって、お母様が言っていたもの」

「それならこういう作戦はどうだ？ 盾に写ったメデューサの姿を確認しながら、彼女が眠っているところに近づき、首を切り落とす。首をキビシスの中に入れたら、逃げる」

「もう一声ね」

エリスは人差し指を立てて微笑んだ。

「あなたがメデューサの首を切り落としたら、私が闇のマントを広げてあげる。そうすれば、駆け付けてきたステンノとエウリュアレは、あなたの姿を見つけることができないわ」

「それはいい。助かるよ」

エリスはニコリとして、ペルセウスの腕を引いた。

「ほらね。私って役に立つでしょう？」

6、メデューサの首

——君は、わたしの娘として生まれてくるべきだったんだよ。

エリスが小首を傾げると、ハデスは大きな手をエリスの頭に乗せて、くしゃりと彼女の髪を撫でた。

——君が望む物を何でも贈ろう。

——君が困った時にはどのような手を使ってでも、君を助けよう。

——君が嘆くならば、このわたしがわたしのすべての力を用いて、君を慰めよう。

エリスがハデスを慕うようになるまで、時間は掛からなかった。

だが、ゼウスは二人の接触を嫌い、ハデスを己の神殿に招かないようになった。

エリスは不満げにゼウスに問うた。

「お父様、どうして近頃ハデスは会いに来てくれないの？」

「エリス、その名を口にするのはやめなさい」

「どうして？」

「お前をペルセポネのようにするつもりはないからだよ」

ゼウスがデメテルに生ませた娘ペルセポネは、ハデスの妻だ。

ハデスに見初められ、連れ攫われるようにして無理矢理ハデスと婚姻させられてしまったと聞く。

冥府の食べ物を口にしてしまったペルセポネを連れ戻すことはできないが、エリスまでもハデスにくれてやるつもりはない、とゼウスは言った。

けれど、違うのだ。エリスは思う。

自分とペルセポネは違う。

ハデスがエリスに向けてくる想いはそのような想いではないのだ。おそらくハデスはエリスを愛しているだろう。だが、それは女としてではない。娘として、だ。

——愛おしい。

ハデスはエリスに言う。

——愛おしい娘。

そして、続ける。哀れな娘だ、と。

ゼウスがハデスとエリスの接触を妨げても、ハデスは度々エリスに使者を寄こした。

闇のマントもそうして贈られた。キビシスも。

エリスはペルセウスが己の懷にしまったキビシスを見やって、そつと息を吐いた。

ハデスはエリスに様々な助言をくれる。

それら助言で、役に立たなかった情報など今までひとつもなかった。

きっと今回の助言も何かあるのだろう。

そして、メデューサが身籠もっているという子どもの存在を、エリスは不気味に思った。

森が終わり、日差しが二人を包む。慌ててエリスは闇のマントを羽織った。

アポロンが空からエリスを探しているかもしれない。

湿った大地から、乾いた砂地になる。

大きな岩がゴロゴロとした場所に出てしばらく行くと、ついに洞

窟を発見した。

ペルセウスが息を呑む音が小さく、だが、大きく響いて聞こえた。アテナから借りた青銅の盾を鏡のように用い、ペルセウスは洞窟の中を確認する。

メデューサの姿はすぐに見つけることができた。手ごろな岩にもたれ掛かり、こんこんと眠っている。

頭の蛇たちもぴくりともしない。

ペルセウスはメデューサに歩み寄った。

そっと、そっと。足音を忍ばせて距離を縮めていく。

エリスは闇のマントを頭から被ったまま、ペルセウスの背中だけを見つめて進む。

そして、ついにペルセウスがハルパーを振り上げた。

ダンッ。

鈍い音。

そして、大気を切り裂くような悲鳴声。

二人は思わず、耳を両手で塞ぎ、瞳も硬く閉ざしてしまった。

次の瞬間。

遠くの方でも気味の悪い悲鳴が聞こえ、それは次第にこちらへと近付いてきた。

「早く！ 首をしまうのよ！」

背後に恐怖が迫っている。凄まじい勢いでそれらは駆けてくる。
エリスは瞼を閉ざしたまま叫んだ。

ペルセウスが切り落としたメデューサの首がどこへ転がっていったのか分からないため、不用意に瞼を開けなかったのだ。

ペルセウスが身動いだ気配がした。彼は辺りを盾に写して首を捜している。

雄叫びが聞こえた。もはや声ではない。

意味をなさないその響きは獣のようで、女神であるエリスでさえ背筋を凍らせた。

竦みそうになった足を叱咤して、ペルセウスはメデューサの首ににじり寄った。

彼は直接目を向けたくなる衝動を抑えて、半ば手探りで首をキビシスに放り込んだ。

「エリス！」

ペルセウスがエリスを呼んだのと、メデューサの姉たちが姿を現わせたのは同時だった。

逆立った髪。――いや、無数の毒蛇。

怒りに赤らんだ顔に、耳まで裂けた口。

その眼を見ることはできなかった。あまりにも恐ろし過ぎて！

エリスは闇のマントを広げてペルセウスに駆け寄った。

後ろから抱きつくようにして彼にもマントを被せた。

ギイイイイイイ。

まるで錆付いた扉を開いたかのような声。

ステンノとエウリュアレは首のない妹を見付けて泣き叫んだ。

泣いて、泣いて、抑え切れない怒りを辺りに放つ。

彼女たちの拳は岩を砕き、彼女たちの爪は大地を掻き穿った。

先にそれに気付いたのは、ペルセウスの方だった。

メデューサの腹が奇妙に盛り上がっている。どくん、と大きく脈打つ。

エリスも気が付いて、息を呑んだ。

――生まれる！

吹き出した鮮やか赤。

猛毒だとされるメデューサの血だ。

その噴水の中、それが産声を上げた。

馬？　――いや、違う！

翼を持った馬なんてエリスは知らない。馬ではない。

――それではこの生き物は何？

それはすぐに自らの足で立ち上がり、翼を羽ばたかせた。

「あれに乗って帰ろう」

ふらりと引き寄せられるようにペルセウスはそれに歩み寄り、エリスの返事も待たずにひらりと跨った。

「正気なの！」

ペルセウスは答えない。生まれたばかりの生き物にすっかり魅了されている。

それほど、怪物から生まれ出たとは思えないほど美しかった。

それが嘶く。エリスはゾツとして振り返った。

その馬のような生き物の方ではなく、メデューサの方を。

メデューサの腹部を見やると、ステンノが、ぱっくりと割れたそこに両手を差し入れていた。

取り上げられたのは、血に塗れた赤子。ずっと眼を開き、ニタリと笑った。

エウリュアレが歓喜の声を上げる。

ペルセウスが飛び乗った馬の腹を蹴った。

彼の背に抱きついていたエリスは、その声を最後に聞き、洞窟を後にした。

馬は空を駆ける。エリスはマントを払いのけ怒鳴った。

「戻って！洞窟に戻って！」

「なんだって？」

「あなた、あれを見なかったの？ 私たちはとんでもないものを誕生させてしまったのよ！」

「とんでもないもの？」

「そう。あれは怪物よ。ハデスの忠告はあれのことだったのよ。この馬もどきではなくてね！」

メデューサの血がすっかり落ちると、馬もどきは純白の毛並みを持っていた。

雪のようなそれをペルセウスはうっとり撫で下ろし、言った。

「こいつの名前は、ペガサスだ」

エリスは頬を膨らませた。——今はそんなことどうでもいい。

「戻って！」

だが、ペルセウスは首を横に振った。

あんな恐ろしいところに戻れるかと言うのだ。

ならば、自分だけでも戻ろう。あんな恐ろしい怪物をあのままにしておけない。

おそらくステンノとエウリュアレはあの怪物を慈しみ育てるだろう。

そして、あの怪物は、多くの怪物の祖となるだろう。

エリスがペルセウスの背から己の体を離そうとした。その時だ。悲鳴がエリスの動きを制する。それは、悲痛な少女の叫び声だった。

エリスとペルセウスは辺りを見渡す。

頭上には、どこまでも広がる青い空。そして、足下には、やはりどこまでも広がる海。

——いや、違う。

あそこに見えるのは、陸地。ペルセウスにとって未知の大陸だ。

海岸沿いに目を滑らせていくと、波打つ岩の崖に何かが動いているのを見つけた。

何か。——少女だ。

「なぜあんなところに人が？」

「鎖で岩に繋がれているのよ！」

ペルセウスはペガサスの首を回させ、少女の方へと走らせた。咆吼が、海のうねりのように響く。
エリスは指差した。

「ティアマトだわ！」

まるで島が移動しているかのように、それは近付いてくる。

「ポセイドンが飼い慣らした怪物よ。大クジラよ！」

——それがどうしてこんなところに。

人を襲う恐ろしい怪物であるため、深海の檻の中から出さぬようにと、ゼウスがポセイドンに命じたはずだ。

ティアマトは猛烈な勢いで少女に向かって突っ込んでいく。少女の背後にある岩まで碎きそうだ。

「助けてあげて！」

「けど、あんな巨大な怪物を相手にどうやって？」

「メデューサの首を使えばいいのよ！」

「そうか！」

メデューサの首は、彼女が死んでもなお、その魔力を失わない。

彼女の姿を見て石化する魔法も失われていないのだ。

ペルセウスは頷き、ペガサスを駆けさせる。

エリスは己の翼を羽ばたかせてペガサスから離れた。

すると、ペガサスはペルセウス一人を背に乗せ、怪物の前へと踊り出た。

ティアマトの口はいよいよ目の前に迫っていた。

ぐあああああああ。

波の流れさえ変えてしまう響き。それは、怪物の咆吼だ。

思わず耳を塞いだエリスの目に、ペルセウスがキビシスの中へと

腕を入れるのが見えた。

急いで瞼を閉ざす。

そして、再び瞼を開いた時、ドーンという地を裂くような音が鳴り響き、石化したティアマトが海底へと沈んでいく姿を、その瞳に映した。

ペルセウスがキビシスの膨らみを確認するかのように、その上から軽く叩いている。

エリスは事が上手くいったことを知り、笑顔を浮かべた。

「やったわね、ペルセウス！」

「エリスのおかげだ」

微笑みを返して、ペルセウスは少女の前に降り立った。

浅黒い肌の少女。だが、ハツとする程に美しい。ペルセウスは言葉を失った。

エリスに袖を引かれて我に返り、少女を戒めている鎖をハルパーで砕いた。

「助けてくださって、ありがとうございます」

鈴を転がしたような声。聞き惚れそうになる。

「あなたのように美しい人がなぜこのような場所に繋がれていたのですか？」

「実は、わたくしはあの怪物への贄だったのです」

「何だって？」

驚く二人に少女は深々と頷いた。

「わたくしの名前はアンドロメダ。エチオピア王ケフェウスの娘です。――ある頃からか、エチオピアの海にあの怪物が住みつくようになってしまい、我が国の民を襲うようになってしまいました。困り果てたお父様は神託を受け、その結果、娘であるわたくしを生け贄にすれば怪物は去ると言われたのです。それで、お父様は泣く泣く……」

「あなたをこの岩に繋いだというわけですね？」

「はい」

エリスは小首を傾げた。

「けど、おかしいわ。ティアマトがこんなところにいるはずかないもの。ポセイDONはいったい何をしているのかしら？」

「そのポセイDONがこの海にティアマトを放したんだよ」

「え？」

不意に頭上から響いてきた声にエリスは驚く。

ペルセウスもアンドロメダもエリス同様に瞳を大きくして、その突然の声に振り返った。

「ヘルメス！」

「無事にメデューサを退治できたようだね」

爽やかに笑う彼にエリスは眉を寄せる。

「今の話、どういうことなの？ ポセイDONはわざとティアマトを檻から逃がしたってこと？」

「そうだよ。ポセイDONはわざとティアマトを放ったんだ。――アンドロメダの母親はカシオペアという。彼女はとても自慢好きでね、己の娘の美しさを指してこう自慢した」

——50人いると言われる海の主の孫娘たち。その誰よりも、わたくしの娘アンドロメダの方が美しい。

「これを聞き知ったポセイドンは怒り、エチオピアの海にティアマトを放ったというわけだよ」

なるほど、とエリスが頷いたのを確認して、ヘルメスは片手を差し出した。

「さあ、エリス。天界に帰る時間だ」

エリスはペルセウスを振り返った。ヘルメスのその手と彼の顔を見比べる。

「……でも、まだペルセウスの旅は途中だよ？」

「それでもエリス、君の冒険は終わり」

「でも、私、オケアノスに戻らないと」

「どうして？」

あんな恐ろしい場所に、とヘルメスは言葉を続けた。

エリスは言い淀む。

確かにオケアノスは恐ろしい場所だ。

ステンノとエウリュアレだけではなく、他にも多くの怪物が棲んでいるのだと聞いている。

けれど、エリスには気になることがあった。あの赤子のことだ。メデューサの腹から生まれた怪物のことをヘルメスに言おうか言うまいか悩み、結果、エリスは口を閉ざした。

微笑むヘルメスに一寸の隙も無かったからだ。

彼はペルセウスに目をくれると、こちらにも涼しげに微笑んだ。

「ペルセウス、君はアンドロメダをケフェウスの元へ送ってあげるんだよ」

「はい」

「君に幸あらんことを」

ふわりと風が舞う。エリスの腕を掴み、ヘルメスは空を浮かんだ。諦めたエリスはペルセウスを見下ろしながら、ヘルメスの首に両腕を回す。

「さようなら、ペルセウス」

「エリス、ありがとう」

背中に回されたヘルメスの腕。

エリスは抱きかかえられるようにして、天界への帰路を進んだ。

7、生み出した闇

目前に、腕組みをしたアルテミス。――弓を構えていないだけマシかもしれない。

エリスは頭を垂れて謝った。

「ごめんなさい」

ため息が漏らされた。深く、重く。

「わたしがどれだけ案じて、どれだけお前を捜したと思っているんだ？ わたしだけではない。アポロンも、ヘルメスも、ずいぶんとお前を捜した」

「――ごめんなさい」

ぎゅっと握り締めた小さな拳を見やり、アポロンが、凜々しくも美しい妹の肩を軽く叩いた。

「もうそのくらいにしてやれ。いいじゃないか、父上に知られる前に戻って来られたんだからさ」

「アポロンは甘い！」

「俺はエリスが可愛いのだ」

ずるい、とアルテミスは片割れを睨んだ。

アルテミスとてエリスが可愛い。

だからこそ叱るのだが、本当ならばアポロンのようにエリスを猫可愛がりしたい。

ぐりぐりと幼い頭を撫で回し、小さな軀を抱き締め、白く柔らかい頬に己の頬寄せている兄が羨ましくも嫉ましいのだ。

矢に指が掛かりそうになるのをグツと抑えるためにアルテミスは沈黙した。

そこに厳かな足音が響く。振り返ると、父神がヘルメスを連れてこちらにやってくるのではないか。

慌てて兄妹は居住まいを正した。

「お久しぶりです、父上」

「ご機嫌麗しく何よりでございます」

うむ、とゼウス。エリスを旁らに呼ぶと、その小さな肩を抱いて、己に跪いているアポロンとアルテミスに立ち上がるように言った。

「時に二人は、ペルセウスを知っているか？」

「ええ、存知上げています」

一瞬ぎくりとしたのはアポロンの方で、何食わぬように応えたのはアルテミスの方だ。

ゼウスは再び、うむ、と頷いた。

「ペルセウスはエチオピアの王女アンドロメダを妻に迎え、ティリユンスの王になった」

「ティリユンス？　またどうしてそんな田舎の王に？」

「アポロン、お前の予言が当たってしまったからだ」

「俺の？　えーっと、どの予言ですか？」

覚えが多すぎて分らないと肩を竦めた息子に、ゼウスは笑う。

「ペルセウスはラリッサの街で競技会に出場した。そこでペルセウスが投げた円盤が、老人に当たり、その老人は死んでしまう。――さあ。いったい、誰が死んだのだと思うかい？」

「まさか、アルゴス王アクリシオス？」

——ダナエーの父王で、ペルセウスの祖父だ。

アルテミスの答えに満足して、ゼウスはにっこりと笑みを浮かべた。

「ペルセウスは己が王を殺してしまった国を継ぐことはできないと言ひ、従弟であるメガペンテスにアルゴスの王位を譲り、メガペンテスが治めていた国ティリュンスの玉座に着いたというわけだ」

そうですか、とアポロン。彼は少し考えてから静かに口を開いた。

「そう遠くない未来、ペルセウスは城壁で囲んだ都市を造るでしょう。そして、その都市はこう呼ばれます。ミュケナイ、と」

「新たな予言か」

「はい」

「では、そのミュケナイが栄える頃、様子を見に行きましょう」

——英雄が為し得た功績を。

ふと、ゼウスはエリスを見下ろした。

その薄汚れた金髪を撫でると、穏やかな声を響かせた。

「エリス」

「はい、お父さま」

「お前に頼みがある」

「頼み？」

エリスは瞳を大きくした。今だかつて父神からそのようなことを

言われたことがなかった。

いつだって子ども扱い。鳥籠の鳥を愛でるような扱いしかされたことがなかった。

「何？ 何？ 何ですか？」

期待に頬を染めたエリスに、ゼウスは目を細めた。まるで三日月のように。

ずっとエリスに向かって左腕を差し出す。

「腕輪を落としてしまったようだ。――銀の腕輪。お前も知っている物だ」

「あの腕輪ね」

平服時のゼウスの左腕を飾っている腕輪だ。特に何という品ではない。

「どこで落としたの？」

「地下路だ」

血の気が引いた。

悪寒が走り、世界のすべての音がエリスから遠ざかった。

――地下路？

一瞬にして鮮やかになる記憶。

暗闇。鉛の扉。そして、誰もいない狭い部屋。

――嫌だ。あそこは嫌だ。あそこだけは！

膝が笑う。全身から力が抜け、その場にしゃがみ込みそうになる。救いを求めてゼウスを見上げる。変わらぬ微笑みがそこにあった。

「取りに行ってくれるかい？」

嫌だと叫んだ。

けれど、それは声にはならず、異なる言葉が口から飛び出した。

「うん、分かった」

――違う！

青ざめた顔を左右に振るのだけど、ゼウスの笑みを変えることはできない。

エリスの背を大きな手が押す。

「さあ、エリス。行ってくれ」

行きたくないと足を踏ん張るのだけど、身体はエリスの言うことを聞かない。

ゼウスの言葉に従って神殿の奥へと歩んでいく。

悲鳴さえ出すことができなくなっていた。

やがて、エリスの小さな姿が見えなくなると、ゼウスはアポロンとアルテミスを振り返った。

二人は再びゼウスの足下に平伏していた。

「申し訳ございません！」

ヘルメスが盗み見たゼウスの横顔にはもはや笑みはない。
冷やかな眼で兄妹を見下ろしている。

ダンッ、と杖が地面を突く。ゼウスは低めた声を放った。

「お前たちは何の問題もなく事が済んだと思っているようだな？」

——真実そう思うのであれば、あれを見るが良い」

指し示した先は中庭の池。

アポロンとアルテミスは互いに顔を見合わせると、池に駆け寄った。

水鏡が映し出した景色は岩山。——いや、違う。そこはどこかの城の広間。

床に散乱した岩は、腕、脚、頭。石化した人間たちだった。

「これは……」

息を呑むアルテミス。その頭上にヘルメスの静かな声が降りてきた。

「アンドロメダにはピレネスという名の婚約者がいました。ペルセウスがアンドロメダを妻にすると聞き、ピレネスは軍を率いて攻めてきたのです。——その石化した人間たちはピレネスと彼の兵士です」

「まさかペルセウスはメデューサの首を使ったのか！」

頷くヘルメス。さっと右手を水鏡にかざすと、水鏡は別の景色を映し出した。

だが、そこにも大量の岩が転がっている。

「ポリデュクテスの城です。セリポス島に戻ったペルセウスはその足でポリデュクテスの元に向かいました。そうして彼はこう言ったのです」

——ポリデュクテス、これがお前の望んだ物だ！

「ペルセウスはメデューサの首を広場に向かって掲げ、ポリデュクテスはむろん、彼の兵士たち、広場にいたすべての者たちは石にしています」

ヘルメスが口を閉ざすと、ゼウスの重い声が響いた。

「メデューサの首の使い方を人間に教えると、どういうことになるか、これで分かっただろう。——さて、アポロン。英雄とは何だ？」
「英雄ですか……？」

言い淀むアポロンに代わってアルテミスが口を開く。

「才能や武勇に優れ、それらを活かし、悪を退けた者のことです」
「英雄というものがその言葉通りであるのなら、ペルセウスはメデューサを退治したところまでは確かに英雄であっただろうな。——だが、彼は冥府に魂を送り過ぎた。地の底からハデスの笑い声が聞こえてくる」

悔しげに、ゼウスは杖を握る手に力を込めた。

「ハデスを喜ばす者を英雄とは呼べまい。更に、ペルセウスは己の思い通りにいかぬ者を、怪物の強大な力を使ってねじ伏せた。——己の力で乗り切ることできる者を英雄と言えよう。怪物の力に頼

る者をどうして英雄などと呼べるだろうか？」

ペルセウスにメデューサの首の使い方を教えたのは、エリスだ。
エリスが与えた知恵は、ペルセウスを墮落させた。

喻えそれが彼を救うためであったとしても、彼の英雄の名に泥を塗ることになった。

ゼウスはエリスが去った方に目をやった。遠く、ぼやくように声を漏らす。

「あの子はそういう女神なのだ……」



暗い。

瞼を大きく開いても、その闇は変わらない。

救いはその路が一本道であること。エリスはひたすら前へと進めばいい。

前へ伸ばした自身の指先さえ見失う暗闇。

無音の世界。

自分の足音だけが響いている。

ふと、淡い灯りが見えた。――最奥までもう少しだ。

銀の腕輪を探してついにここまでやって来てしまった。けれど、まだ見つからない。

いったいゼウスはどこに腕輪を落としてしまったのだろうか？

——いや。そもそも本当に腕輪を落としたのだろうか？

エリスはゾツとして両腕で自身を抱き締めた。

自分はゼウスに気が付かれる前に神殿に帰って来た。

ゼウスは知らないはずだ。エリスが外に出たことを。

だから、この地下路の最奥の部屋に閉じ込められなかったのだ。知っていたらそれこそ有無を言わず閉じ込められていたはず。

大丈夫なはずだ！

——だとしたら、何て嫌なタイミングだろう。

今まで一度も地下路へ用を頼まれることなんてなかった。

このタイミングはまるで、ゼウスがすべてを見通しているかのようだ。

背筋が凍る。

——腕輪。銀の腕輪を探そう。

もしも本当に腕輪が落ちていたのなら、ゼウスには他意がないことになる。

本当に腕輪を落として、エリスに拾ってくれるように頼んだのだ。けれど、もしも腕輪が落ちてなかったら……？

松明の明かり。それが照らす鉛の扉と対面して、エリスは硬直した。

この扉の向こう側の部屋が、地下路の最奥だ。

これまでに指輪は落ちていなかった。やはり、指輪など、ゼウスは落としていないのかも知れない。

——ううん。まだだ。部屋の中に落としたのかもしれない。

ガチャンと門を外し、重たい扉を引く。女の悲鳴のような響きを上げて、扉が開いた。

赤い眼がエリスを見やった。エリスは息を呑んだ。

「そこに誰かいるの？」

擦れ声。それに笑ったような気配が部屋の奥で、した。

「誰？」

「あたしを忘れてしまったの？」

「誰？」

少女の声。よく知った響きである。

部屋の奥の赤い瞳が細められ、くすくすと笑い声が響いた。

エリスは壁から松明を抜き取ると、部屋の中を照らした。

はっとする。エリス。そこにいたのは、紛う無き自分自身だった。

「私!？」

だが、部屋の奥に座り込んだ自分は首を横に振る。

「違うわ。――ひどいのね、あたしを忘れてしまうなんて」

「あなたは誰？」

「あたしはレーテ」

「レーテ？」

「あなたの子。あなたが生み出した存在よ」

「私が？」

エリスは思わず飛び退いた。

——知らない！

身に覚えがない存在を驚愕の瞳で見つめる。

と、その時。

耐え難い吐き気が胸の奥から何かが迫り上がってくる。

エリスはその場に両手を着いてかがみ込んだ。

咽が大きく開く。——出てくる！

「ぐはっ」

ゴボリ。

湿った音が響き渡った。

エリスの口から飛び出てきた塊は黒光りしながら、大きく大きく膨らんでいく。

「な、何？」

エリスはヘタリと力が抜けたように尻を着いて座り込み、それを見上げた。

少年だった。

みるみるうちにエリスよりずっと大きな少年の姿になり、エリスを見下ろして笑みを浮かべた。

レーテが言う。

「おめでとう、フォノス。あなたの誕生を祝って、今日というこの日この時、地上で失われた多くの命が冥府へと旅立った」

——なんだって？

エリスはレーテに振り返る。

「どうということ?」

「どうって?」

レーテは小首を傾げた。エリスがよくする仕草とそっくりだった。エリスはフォノスを指差した。

「どうということよ!」

レーテは笑う。彼女にフォノスと呼ばれた少年も笑む。

「どうって、あなたが生んだのよ。あたしを生んだ時みたいだね。今後もあなたは多くの子を生むのよ。運命の時までにね」

「運命の時……?」

「あたしたちが必要だからよ」

「いらないわ、あなたたちなんて!」

拳を握り、怒鳴る。

気味が悪い。

自分そっくりなレーテも、誕生してすぐに自分よりも大きく成長してしまったフォノスも。

——こんなものが自分の中から出てきただなんて!

知らない。知らない。私は知らない!

生み出してしまった闇よりもなお暗い存在。

彼らが抜けた自分の胸は、ガッポリと大きな穴が空いてしまったように、その空洞に風が通り、ヒュウヒュウと呻いている。

胸をきつく押さえた。唇を噛みしめる。

そして、エリスは糸が切れてしまったかのように、フツと意識を

手放した。

解説1

この物語は、ギリシア神話をもとにしたファンタジーです。

ギリシア神話は、紀元前15世紀から口承形式で伝えられてきて、紀元前9世紀から8世紀頃に文字で綴られたとされています。

つまり、長いこと口承で伝えられてきたこの神話には異説が多いのです。

故に、この物語では物語上に都合の良い説を使っております。

さて、まずは主人公エリスについてです。

不和と争いの女神エリスは、詩人ホメロスによれば、軍神アレスの妹で、彼に従って戦場を突っ走っているような、野蛮で乱暴で嫌われ者の女神です。

ですが、詩人ヘシオドスによれば、夜の女神ニクスの娘だとされ、口争いや殺人などの災いの母です。

ニクスはガイアより生まれ、ニクスはアイテール（高天の気）とヘーメラー（昼）を生みますが、同時に、タナトス（死）、ヒュプノス（睡眠）、オネイロス（夢）、モイライ（運命）、ネメシス（応報）、エリス（不和）なども生みだします。

そして、エリスは、アーテ（破滅）、レーテ（忘却）、マニア（狂気）、ポイネ（復讐）、アルゴス

（苦痛）、ホルコス（誓言）、リモス（飢餓）、フォノス（殺戮）、ポノス（労苦）、マケ（戦争）、ヒュスミネ（戦闘）、アンドロクタシア（殺人）、ネイコス（闘争）、プセウドス（戯言）などの恐ろしい神々を1人で産み落とします。

故に、こちらのエリスもやはり人間には嫌われている女神となって

います。

さて、『天界の黯い獣』では、アレスの双子の妹としています。そのため、ゼウスとヘラの娘です。

アポロンやアルテミス、ヘルメスとは、異母兄妹となります。

そして、ゼウスはエリスが「災いの母」にならないように、エリスの成長を止めているという設定です。

ですが、エリスは物語スタート以前に一度、神殿を抜け出し、レーテを生み、更にペルセウスとの冒険を経て、フォノスを産み落としました。

このように、エリスはゼウスの庇護から抜け出す度に恐ろしい分身を生みだし、「約束の日」に向かっていく……というのが、この物語です。

「約束の日」は、エリスが関わるもっとも有名なエピソードを差しています。

すなわち、トロイア戦争です。

女神テティスとペレウスの結婚式に招かれなかったエリスは、その腹いせに、「最も美しい女神に」と記した黄金の林檎を宴の場に投げ入れ、ヘラ、アテナ、アプロディーテの争いを起こします。

これを解決するために選ばれたのは、トロイアの王子パリスで、3人の女神はそれぞれ次の言葉をパリスに言います。

ヘラ「世界を支配する力を、お前に与えよう」

アテナ「いかなる戦争にも勝利を得る力を、お前に与えよう」

アプロディーテ「最も美しい女を、お前に与えよう」

パリスはアプロディーテを選び、このことがトロイア戦争のきっかけになりました。

トロイアとギリシアが戦っているその空の上では、神々も両派に分かれ、戦っていたと言われています。

ヘラ、アテナ、ポセイドンがギリシア側に、アポロン、アルテミス、アレス、アプロディーテがトロイア側に味方しました。

つまり、エリスは、神々を不和にし、人間界を戦争に導いたわけですね。

そんな彼女は、芸術においては有翼の女性として描かれることが多いです。

さて次に、ペルセウスについてです。

ペルセウスは、ギリシア神話に登場する多くの英雄たちと同じく、半神の英雄です。

そして、おそらくギリシア神話の中で最初に登場する英雄です。

閉じこめられたペルセウスの母親と交わるために、ゼウスは黄金の雨に変身したといっています。

雨に濡れただけで子どもを身籠もったダナエーの気持ちを思うと、何とも言えない気分になりますね。

当然のことながら、ペルセウスの冒険にエリスは本来ノータッチです。

関与した神といえば、アテナとヘルメスです。そして、ハデスもそ

うなのかな？

アテナの楯、ヘルメスの翼のあるサンダル、ハデスの隠れ兜を身につけ、ペルセウスはメドゥーサの居場所を聞くためにグライアイ三姉妹の元に行きます。

彼女たちは生まれつき醜い老女で、三人でたった一つの眼と一本の歯しか持っていないません。

この眼と歯を奪って脅し、無理やり聞き出すと、彼女たちの姉であるゴルゴン姉妹を発見します。

そして、メドゥーサの首を取ることに成功しました。

退治したメドゥーサから誕生したのが、翼ある馬ペガサスとクリューサーオールです。

クリューサーオールは、ゲーリュオンとエキドナを生み、ゲーリュオンは後にヘラクレスと戦い、エキドナは多くの怪物の母となります。

メドゥーサを退治した帰路、ペルセウスはアンドロメダと出会います。

彼女は絵画において白人の姿で描かれることが多いですが、エチオピアの王女ということから黒人なのではないかという説もあります。

『天界の黯い獣』で、いったいどれほどの英雄たちを描くことができるのか分かりませんが、トロイア戦争に向けて、ゆっくりと、気が向くままに書いていきたいと思っています。

8、茜色の鳥

かの魔女のことを

わたしに語ってください ムーサよ

あの愛を あの悲しみを

あなた方の舞で 語ってください



天界の空に雨はない。

そもそも雲の上に存在する世界だ。さもあろう。

青を背景に鳥が飛んでいる。茜色の大きな鳥だ。

どこぞの神の使いだろう。

そうでなければ、神自身が変化した姿だ。それほど大きな鳥だ。

やがて気付く。どうやら鳥はこちらに向かって来ている。

純白に輝くゼウスの神殿。その外門の真上まで来ると、鳥は大きく旋回しながら、大理石の床に華麗に降り立った。

鳥の輪郭が揺らぐ。

縦に伸びたかと思った次の瞬間、それは青年の姿に変わっていた。

神殿の奥で、窓の外をぼんやりと眺めていた瑠璃色の瞳が驚いた。そして、アレス、とその口は小さき呟き、身を翻す。

——今日こそは、あの小麦色の背中に爪を突き立ててやろう。いやいや、あの赤みを帯びた金髪をむしり取ってやろう。

とにかく今日こそ彼をぎゃふんと言わせてやるのだ。

赤みを帯びた金髪が左右に大きく揺れる。

それは、鬱陶しいほど長く、豊かに腰を覆っている。

陶器のように白い手脚を振り回しながら、少女は駆けだした。

やがて、大きな背中を見つけて、足を止める。

そっと、そっと、忍び寄る。目当ての背中はまだそこ。

思い切って床を蹴った時、不意にその背中が消えた。アレスが振り返ってしまったのだ。

「エリス！」

嬉々とした声と共に、幼い身体は逞しい両腕に捕らえられてしまふ。

少女——エリスは悔しさに顔を歪ませた。

「離して！」

だが、アレスは聞かない。

ますます強くエリスを両腕の中に抱き込むと、その頬に口づける。

「エリス！ 俺の可愛いエリス！」

「やめてって。もう離して！」

足をばたつかせ、拳を振り回すと、ようやくアレスはエリスを解放した。

彼はにっこりして、エリスを見下ろす。

「なんだ。元氣そうじゃないか」

「どういう意味？」

「元氣がないって聞いたんだ」

「誰が？ 誰に？」

「お前が。ハデスに」

「ふーん」

エリスは不満げに鼻を鳴らした。

伯父であるハデスは、エリスに元氣がないことを知っているらしい。

ならば、彼自身がエリスに会いに来ればいいのに。

冥府の主である伯父は、エリスをとてよく可愛がってくれ、あらゆる助けを与えてくれるが、ある時から、なかなか会いに来てくれなくなった。

むっと、顔を顰めながら、エリスは先に立って歩き出した。

神殿の奥。ゼウスがエリスに与えた宮の方だ。

すると、何を考えているのか、アレスもエリスの後に従って来た。

主宮を横目に回廊を行き、中庭を突っ切って更に行くと、エリス

の宮にたどり着く。

その一歩手前でエリスはアレスに振り返った。

「何の用？」

「何って、エリスに会いに来たんじゃないか」

「私に？」

「そうさ。他に用なんてない」

「ふーん？」

半眼で見やってから、ふいっと顔を逸らし、仕切りの布を払い上げるようにして部屋の中に入った。

足音が追ってくる。当然の顔をしてアレスも部屋に入ってきた。

「エリス、父上は？ 神殿内に気配を感じない」

「留守よ。ミケナイの様子を見に行っているわ。――てっきりお父様の留守を狙って来たのかと思った」

「実はその通りだ」

エリスは肩を竦めた。

その肩をアレスは掴んで、エリスの動きを封じる。視線を合わせるようにしゃがみ込んだ。

「なあに？」

むすっとしたまま彼を見上げれば、アレスは双子の妹の不機嫌に気が付いていない様子で、にっと唇の端を上に取り上げて笑った。

「ここにアフロディテが来たら、これを彼女に渡して欲しい」

「何これ？」

「渡せば分かる」

腰帯だ。アレスの物らしいのでそれなりの品だが、染色はいまいちだし、刺繍の出来もいまいちだ。

——こんなものを美の女神であるアフロディテに渡してどうするつもりなのだろう？

エリスは双子の片割れの正気を疑った。

「嫌よ。こんな物をアフロディテに渡したら恥になるわ」

「大丈夫だ。きっと喜んでくれる。——だけど、エリス。これを彼女に渡す時、もしも回りに誰かいたら、俺からだって言うてはダメだ」

「なぜ？」

「いろいろと事情があるんだ。それから、もしもヘパイストスが近くにいたら、時を改めろ」

「ヘパイストスお兄様に見つかったら、良くない物なの？」

「ものすごく良くない物なんだ」

「ふーん」

いつの間にか手に押し付けられていた腰帯をまじまじと見やって、エリスは再び鼻を鳴らせた。

そして、瞳を曇らせる。

やっぱり、目の前の相手がアレスではなくハデスなら良かった、と思う。

ゼウスが留守なのだ。伯父をエリスから遠ざけている者はいない。神殿を包むゼウスの結界だって、普段よりも弛んでいるかも知れない。

だが、ハデスは自分の代わりにアレスを寄こした。

エリスは深く重くため息を漏らした。

元気がないというのは本当のことだ。

ペルセウスの寿命が尽きたのは、もう数十年前も前。

彼と出会い、冒険をした時間は、神であるエリスにとって一瞬前の出来事のようなものだ。

目を閉ざせば、鮮やかに脳裏に思い起こせる。

その名を呼べば、すぐ隣でペルセウスが返事をするのではないかとさえ思う。

そして、ペルセウスと過ごした時間は、エリスにとって楽しいものだった。

ずっと彼と冒険をしていたい。彼と共にいたい。そう思ったくらいだ。

だが、それは過ちだった。

エリスは父神の言うとおり、神殿から出るべきではなかったのだ。

ペルセウスという人間に触れて、エリスはフォノスを生み出してしまった。

レーテは言う。

——エリス、あなたほど純粋な心の持ち主はいないわ。だからこそ、人の心に敏感なのよ。

人の悪に触れれば、エリスの心も悪に染まる。

けれど、エリスの心は悪を受け付けない。

故に吐き出し、吐き出されたモノは、エリスの子となる。

——そうか。だからお父様は私を神殿に閉じ込めているんだわ。

フォノスは自分のことを、殺戮の神だと名乗った。

殺戮。——なんて恐ろしいものを生み出してしまったのだろう。
もう二度と神殿から出ない。出たくない！

エリスはギュッと唇を噛みしめた。

じわりと滲み出たものは鉄の味がしたが、構わず更にきつく噛み
締めた。

9、片割れ

不意に柔らかな感触がして、エリスは瞳を大きくした。自分の唇に何かが触れている。信じられない。それはアレスの唇だ。

彼の唇が、エリスの噛みしめられたそれに触れていた。瞬時、エリスの眉が吊り上がる。

利き手を大きく振り上げると、それは簡単に離れて、エリスの手は空を切った。

エリスが、キッと睨み付けければ、アレスは心配げな表情を浮かべた。

「やめろ。血が出ている」

あ、と短くエリスは声を漏らす。心配されたのだと知れば、怒気は消える。

すると、その隙について再び顔を近付きた。ぺろりと傷口を舐められる。

「……アレス」

「何だ？」

もはや彼を怒る気力はない。

それよりも尋ねて見たかった。自分の片割れに。

「もし、もしもね。自分のせいでたくさんの人間が死んでしまったことを、どう思う？」

「どう？」

「私のせいでたくさん人間が死んでしまったの」

「そうだな。ハデスならこう言う。——よくやった、エリス!」

言ってアレスはエリスを抱き締めた。

抱き上げ、大股で異動すると、長椅子に腰を降ろさせる。

そして、そのままエリスを後ろへと押し倒した。

エリスはアレスの顔を見上げて、眉を寄せる。

「よくやった?」

「ハデスが言うには、人間は多くなり過ぎたらしい。神々の力が偉大だとしても、人間の数が増えれば、人間が神を脅かすかもしれないって」

「人間が神を?」

「しかも、人間はネズミみたいにどんどんその数を増やし続けているんだと。——だから、ハデスは人間をたくさん殺したお前を誉めてくれるさ」

ちゅうっ、と音を立てて、エリスの額にキスを落とすアレス。

自分を見下ろしてくる瞳が次第に熱を増していることに、エリスはまだ気が付かない。

ただエリスは小首を傾げた。

「だけど、お父様は誉めてはくれないでしょう?」

「父上に誉めて貰いたいのか?」

「怒られたくないわ」

アレスの重みを感じて、エリスは眉間に皺を寄せた。

首筋を舐められて、更に顔を顰めた。

さすがに気付いて、エリスは両手をアレスの胸に着き、身を離そうと抵抗した。

「やめて」

腰紐を解かれ、キトン一枚しか身に着けていなかったエリスは簡単に裸になってしまった。

恥ずかしいという思いはなかった。

だって、相手はアレスだ。

お互いが生まれる前からお互いのことをよく知っている。

だけど、そんなアレスの手が自分の肌の上を滑っていくのが、途轍もなく嫌だった。

アレスに剥かれたエリスの肌は透き通るように白い。

香油の塗られた肌は滑らかで、甘い香りが立っている。

それらに誘われるかのように、アレスの唇がエリスの小さな胸に寄せられた。

「嫌——っ！」

カチャリ。

金属が擦れる音がして、アレスの瞳が鋭く輝いた。エリスの臍の上から重さが消える。

エリスは潤んだ瑠璃色の瞳をアレスの背後に向けた。

黄金の剣が燃え立つような光を放つ。

アレスの首筋に剣先を突きつけているアポロンがそこにいた。

「無粋な奴だ」

「エリスは嫌がっている！」

「お前に何が分かる？ エリスを理解しているのは俺だけだ。俺の

エリスだからな」

「お前の？ エリスは誰のものでもない。そこをどけ！」

再び音を鳴らせて、アレスの首に剣先を滑らせた。つーっと、赤い筋が流れた。

舌打ちをして、アレスはエリスから離れた。

「こっちに来るんだ、エリス！」

「アポロンお兄様！」

助かったという思いに気が緩んだのか、ポタリと涙がこぼれ落ちる。

嫌で、嫌で、堪らなかった。

アポロンに駆け寄ると、その長い脚にしがみつく。

すると、すぐさまアポロンの暖かい手が背中を優しくさすってくれた。

「俺は父上から留守を頼まれている。喩え父上の嫡子であるお前でも、この神殿で勝手はさせない！」

「ほう。自分が妾腹だということを理解しているらしいな。だったら、俺に指図するな！」

神殿を揺るがすような怒気。

エリスに対しては笑みしか向けないアレスが他者に向ける感情は激しい。

辺り一帯に青い炎を放ち、瞳をギラギラさせてアポロンを睨み付けている。

ぐいっとエリスに向かって腕を伸ばす。

「来い」

低い響きだ。ぞっとしてエリスはアポロンの後ろに身を隠した。

「エリス、来い！」

言葉が出なかった。初めて目にするアレスの怒りにエリスは声を失った。

そして、メデューサに睨まれたかのように、エリスは身動きが取れなくなってしまった。

その時。雷鳴が響き渡った。

一瞬にして、アレスの炎が消し飛んだ。

部屋の空気が、まるで冷水をかけられたかのように変わる。

アレスもアポロンも驚きを隠せない表情をして、部屋の入り口の方へと振り返った。

「アテナ！」

カツカツカツ、と靴音を立てて、勇ましく甲冑を身に纏った女が部屋の中に入ってきた。

冷ややかな視線をアポロンに、そしてアレスへと向けた。

「アポロンだけでは不安だと、父上に頼まれて来てみれば、案の定だな。――アレス、ここで何をしている！」

アテナの目はエリスの存在を無視して、不甲斐ないアポロンと、その合わないアレスのみを睨み付けている。

「さっさと出て行け。――さもなくば、わたしの雷はお前の軀を貫くだろう！」

ぐっとアレスの咽が鳴る。

アテナはゼウスが最初の妻メティスとの間につくった子であり、

彼の自慢の娘である。

そのため、嫡子とは言え、アレスはアテナだけには手を出せない。アレスは大声でわめくと、炎で作った大槍をアテナとアポロンの間に投げつけた。

そして、エリスの部屋を飛び出していった。

石造りの床に固い踵の音が響く。

武装したアテナは凛々しく、そして美しい。その気高さはエリスを圧倒し、萎縮させた。

ぎゅうつと、アポロンのキトンを握り締める。

「どうした？」

サファイアの瞳がエリスを映す。エリスは恥じるように首を横に振った。

「なんでもない」

そうか、と短く言うと、アポロンはエリスの髪をくしやりと撫でた。

「エリス、アレスにはもう近付くな」

「アレスと私は兄妹なの？」

「兄妹でも。――いや、同腹の兄妹だからこそだ」

10、愛の女神

アレスとエリスは母を同じくする。もちろん、父はゼウスである。

ゼウスの正妻であるヘラは、まずヘパイストスを生み落とした。

この長子は、ゼウスの娘としてアテナが生まれた時、その誕生に怒りと焦りを感じたヘラが早産した子である。

早産は、ヘパイストスの両足を醜く曲げた。

正妻としての名誉を挽回するために生んだ子であっただけに、ヘラはその不完全さを疎み、ゼウスもまた彼を嫡子として認めなかった。

次にヘラが生んだ子は、エイレイテュイアだった。

彼女は出産を司る女神であり、結婚の女神であるヘラの助けとなっている。

——とは言え、エイレイテュイアの持つ力は微力であり、神々の中でも発言力は小さい。

ヘラはすぐに次の子どもを望んだ。ゼウスの跡継ぎとして相応しい男子を。

そして、アレスとエリスの双子が誕生した。

ヘラは歓喜した。双子は誕生した瞬間から力強く光り輝いていたからだ。

ところが、すぐにアレスの乱暴な性格は、ヘラの頭痛の種になった。

争いが起こる所には常にアレスの姿があり、その争い事を更に大きく、悲惨なものにしてしまう。

さらに、ヘラはいつまでも成長しないエリスのことも、気がかりで仕方がなかった。

彼女は自分の助けとなる子どもを望むようになった。

ヘベは、そんなヘラがまさに望んだ通りの娘だった。もっともヘラに従順で、容姿もヘラに似ている。

彼女を溺愛するヘラは、ヘベの容姿の美しさを褒め称え、常に自分の傍らに置いた。

しかし、ヘベは美しいだけの娘だ。

そのため、ゼウスにより神々の給仕係を命じられている。

エイレイテュイアよりも更に力のない女神には、他にできる仕事がないからだ。

「父上が一番愛されているのは、アテナだ。父上が一番信頼されているのは、ヘルメスだ」

「そして、父上が跡継ぎにと、本心では思っていらっしゃるのは――」

アテナはその先を言わなかった。

ただ、アポロンを振り向いて、ニツと唇を横に引いた。そして、外衣を大きく翻した。

カツン、カツン、と靴音が響く。エリスの脇を通り過ぎると、アテナは部屋を出て行った。

その背中を見送ってから、エリスはアポロンを見上げる。

「つまり、どういうことなの？」

「アレスはお前を妻にと望んでいる」

「妻？ ウソよ。信じられない！」

「いや、嘘じゃない。――アレスはその思いをヘラ様に告げている」

「それで、お母様は？」

「喜ばれたよ。アレスとお前が夫婦になり、アレスが父上の後を継げば、ヘラ様はご自身の地位が確固たるものになるとお考えなのだ。」

アレスもお前もヘラ様の血筋だからな」

それに、とアポロンは苦虫を噛み潰したような表情をした。

「ヘラ様は、アレスが妻を持てば、あいつのあの所業がどうにかな
るとお考えなんだ」

「アレスはそんなに悪いことばかりをしているの？」

「お前はこの神殿から外に出ないから知らないんだ」

エリスは俯いた。その頭をアポロンの暖かな手が撫でる。

「大丈夫だ、エリス。きっと父上はお前の嫌がることを承知しない
さ。お前が嫌だと言い続けている限り、アレスとお前が夫婦になる
ようなことはない」

「私……」

幼い身体。いつまで経っても大人になれない自分を思っ、エリ
スは息を吐く。

「私、愛を知らないの。誰かを愛したことないのよ。まだ子どもだ
から」

「エリス？」

「アポロンお兄様、好きよ。アルテミスお姉様も好き。ヘルメスも
好きだし、ペルセウスのこととも好きだったわ。——だけど、ペルセ
ウスがアンドロメダを愛したように、私は誰かを愛したことはない
の」

——愛って、何？

「私は愛を知らないから、アレスの気持ちには答えられないの。嫌

かどうかなんて分からないわ。それ以前の問題だからよ」

「お前は嫌がっていたさ。アレスに押し倒されて、悲鳴を上げていただろう？」

「いきなり押し倒されたんですもの。嫌に決まっているわ。だけど、アレスがちゃんと順を追って話してくれて、私の心を知ってくれようと努めたのなら、違っていたかもしれないわ。——だって、私、みんなが嫌うほど、アレスのこと嫌いじゃないんですもの」

憎たらしいと思う時はある。背中に爪を突き立ててやりたいと思うのは、常だ。

だけど、心底憎んだことはない。憎めるわけがない。

——だって、アレスは自分を愛してくれている！

可愛いと言って、抱き締める。大事だと言って、キスをする。

それらを嫌だと言って抗っても、心底不快だと感じたことなんてなかった。

エリスは唇を俯き、噛みしめた。

愛が、自分の想いが、自分自身がよく分からなかった。

ふと、足音が帰って来た。

怪訝に思い、部屋の入り口に目を向ける。

そして、彼女の姿を待つと、予想以上の不機嫌顔が現れた。

アテナだ。彼女は短く言葉を吐いた。

「客だ」

「客？」

「あの女が来た。お前が相手をしろ」

留守を任されているアポロンに異論はないが、アテナの言うあの女に見当が付かない。

眉を寄せると、アテナは焦れっただけに声を荒げた。

「アフロディテだ。あのふしだらな女、顔を見ただけで吐き気する」

ああ、とアポロンは頷いた。確かに自分が客人をもてなした方が良さそうだ。

彼女たちの仲の悪さを、天界は疎か、地上の人間たちでさえ知らない者はない。

アテナがアフロディテを毛嫌いしているだけではなく、アフロディテもアテナのことを疎ましく思っているのだから。

「エリス。お前が愛がどうのこうのって言うからだぞ」

ゼウスの留守に彼女たちが争うようなことになっては大変だと、うんざりしながらアポロンはエリスの頭をくしゃりと撫でた。

エリスはアポロンを見上げる。

「私がアフロディテの相手をするっていうのは？」

「それは助かるけど……」

「何か問題があるの？」

「お前はまだ子どもだ」

「あら、わたくしは構わなくてよ。——と言うよりむしろ、可愛いエリスがお相手してくれるのなら、そのつまらない女よりも数倍良いというものだわ」

「アフロディテ！」

恐ろしいほどに低い声はアテナのもの。

突如として現れた女神に対して、その怒りを隠そうともしない。

真っ直ぐに睨み付けている。

「案内なく入ってくるとは、どこまでも不敬な女だ！」

「あなた方、知っていて？　もうとつくに日が昇って良い時刻だつてことを」

「なんだと？」

そう言えば、とエリスも思う。

天界にゼウスがいらない今日に限って、夜が異常なほど長い。

暁の女神であるエオスはいったい何をしているのだろう。

彼女が暁を告げなくては、アポロンも黄金の馬車を走らせることができない。

「エオスは何をしている！」

苛立った声が響く。続いて、踵を踏み鳴らす音。

アフロディテは明らかに顔色を変えたアテナを楽しげに見やって、甘い声を響かせた。

「エオスなら、わたくしが眠らせて閉じ込めてあげてよ」

「何？」

「ゼウス様は下界で美しい娘を見つけられた。アルクメネ。――ペルセウスの孫にあたる娘よ。けれど、彼女にはアムピトリオンという夫がいて、ゼウス様を袖にしたの。そこでゼウス様はアムピトリオンの留守を狙って、彼の姿に変身し、アルクメネに夫だと思わせた。きつと今ごろは、思いを遂げられているところかしら？」

ふふふっ、と笑うアフロディテにアテナは青筋を立てる。

「父上のこととお前がエオスを閉じ込めたことにどんな繋がりがある？」

「だって、一夜限りのことですもの。その夜は長い方が良いわ。存分に楽しめるでしょう？」

夜が明けなくては本物のアムポトリオンは帰ってこない。
そして、夜が続く限り、ゼウスはアルクメネを寝室で愛し続ける
ことだろう。

11、腰帯

ガツン、とアテナの踵が鳴る。

「すぐにエオスを解放しろ」

「嫌よ。せっかくわたくしが閉じ込めたのだから。暁が必要なら、貴女が彼女を救ってあげたら？」

「どこに閉じ込めた！」

「わたくしの神殿。黄金の壺の中よ」

バサリ、とアテナの外衣が翻る。

これ以上アフロディテと同じ空気は吸えないとばかりに、アテナは部屋を去っていった。

アフロディテの甘く潤みを帯びた瞳がアポロンを映す。

「貴方は行かなくて？」

「俺は……」

「わたくし、エリスと二人で話がありますの」

暗に部屋を出て行けと言っている。

気付いてアポロンは一礼し、アテナの後を追うように去っていった。

豊満な身体がエリスの前にやってくる。甘い香りに思わずドキリとする。

「誰かから何かを預からなかったかしら？」

艶を帯びた声だ。エリスは小首を傾げた。

だが、それはわずか。すぐに思い出して、アレスから預かった腰

帯をアフロディテに差し出した。

「そんな物、あなたに渡すの嫌だって言ったのだけど」
「どうして？　これは素敵な物なのよ。ほら、見て」

言って、アフロディテは腰帯を縦に引き裂いた。
中から欠片のような羊の皮が出てくる。

「文？」

「そう。これは、アレスとわたくしだけに分かる方法なの」
「どうして、こんな方法を取るの？」

「アレスとわたくしとのやり取りは秘密だからよ」
「秘密？　――二人で何か悪いことをしているの？」

ふふふっ、とアフロディテは笑う。

「愛を語ることが悪いことであるのなら、そうなのでしょうね」
「愛を？　アフロディテはアレスを愛しているの？」

でも、とエリスは声を殺した。

「アフロディテはヘパイストスお兄様と夫婦でしょ？」
「誰があんな醜い男と！」

さっと顔色が変わった。

美の女神とは思えぬ恐ろしい形相で、エリスを、そして空に向かつて怒気を吐き出す。

けれど、それは一瞬のこと。

言葉を失っていたエリスに気が付き、アフロディテはふっと表情を和らげた。

「あの男とは心ならずも夫婦になってしまったけれど、わたくしの心はアレスのもの。――だから、エリス。貴女とは仲良くしたいわ」

アフロディテは知っているのだろうか。アレスがエリスを妻にと望んでいることを。

知っていて仲良くしたいと言っているのだとしたら、もしもアレスとエリスが夫婦になっても、自分がアレスとの関係が続けることを認めて欲しいということなのだろうか。

自分がヘパイストスと夫婦でありながらアレスと不倫しているように、アレスがエリスと夫婦でありながらアフロディテと不倫することを認めろということだろうか。

――愛って、何？

愛を語ることが悪いことでないのなら、夫のある身で他の男に愛を語ることと許されるのだろうか。

アルクメネは夫アムピトリオンのためにゼウスを拒んだ。

けれど、ゼウスは己の愛を押し付け、アルクメネを我が物にした。それはまるでゼウスがアフロディテと主張を共有しているかのような行為だ。

エリスはアフロディテから目を逸らし、俯いた。

「ねえ、愛って何なの？ 人を愛することって、善いことなの？ 悪いことなの？」

ふっと息が漏れる音が聞こえ、エリスは弾かれたように顔を上げた。大きく見開かれた瑠璃色の瞳。

彼女の表情を見て、エリスは尋ねたことを後悔した。

尋ねる相手を誤ったのだ。愛を司る彼女に尋ねてみたところ答え

は知れている。

アフロディテは指先で円を描くと、その円の大きさに添った鏡を空から取り出した。

「これを貴女にあげるわ」

「これを？」

両手にずっしりとくる大きな鏡だ。エリスの頭ほどある。

裏返してみると、裏側も鏡になっていた。おかしな作りだ。

「それを覗くと、貴女の運命の相手が見えるかもしれないわ」

「運命の？ ……かもしれない？」

いささか曖昧な言い方をする彼女にエリスはうろんな眼を向けた。アフロディテは高い声を上げて笑う。

「だって、貴女に運命の相手がいなければその鏡に映るわけがなくってよ？」

「いないってこと、あるの？」

「この世に、ないってことはないの。――それは帯のお礼だから、遠慮しなくてよくってよ」

「ありがとう」

キラキラと、光を鏡面に反射させてエリスは眉を寄せた。

鏡を覗いても、見える影は自分のもの。運命の相手なんて――。

12、アルケイデース

神殿の主が帰ってきた。

エリスは神殿の正門でゼウスを迎えた。隣にはヘラとヘベ、そしてアテナ。

アポロンは数刻前に黄金の馬車を走らせなければならなくなり、東方へと出掛けて行った。

「留守の間、何事もなかったか？」

ゼウスはまずヘラに挨拶をした。それからアテナに声をかける。

アテナは微笑した。

ないことはなかったが、何事もなく、と彼女は答えた。

広場に向かうゼウスをアテナとエリスが追う。ヘラとヘベは自室へと戻っていった。

彼女たちの気配が感じられなくなってから、ゼウスは外衣の下から布包みを取り出した。

両腕に抱きかかえたそれは何やら重そうだ。

エリスは、ぴよこんぴよこん跳ねて、ゼウスの腕の中を覗き込もうとした。

「それ、何？」

「これかい？　――ほら、見てごらん」

幼いエリスに見えるようにと、ゼウスは歩みを止めて背中を丸めた。

白い清潔な布に包まれたそれを見せる。

「うわっ。赤ちゃん！」

「アルケイデースだ」

「アルケイデース？」

アテナの片眉が吊り上がる。

「まさか、アルクメネという名の娘に生ませたのではないでしょうね？」

「おお、その通りだ。——知っているか、エリス。アルクメネはペルセウスの孫娘だぞ」

「知っているよ。アフロディテから聞いたもの」

「アフロディテがやって来たのか？」

「うん」

元気に頷いたエリスの顔を見やって、ゼウスは確認の視線をアテナに向けた。

「ええ、確かにやって来ましたよ。何しに来たんだか、すぐに帰って行きました。——それより、その赤ん坊をどうなさるおつもりですか？」

「知っての通り、人間の母を持つアルケイデースには寿命がある。大病を得れば死ぬし、大怪我を得ても死ぬ」

わたしはね、とゼウスは目尻を下げた。

「アルクメネが生んでくれたわたしの子が愛おしいのだよ」

夫に義理立てし自分を拒んだ娘——アルクメネ。
無理矢理手に入れて生ませた子どもだと思えば、可愛くないはず

がない。

ゼウスは満面の笑みを浮かべ、赤子をあやしている。

「この子にヘラの乳を吸わせれば、不死を与えることができる。だから、連れてきたのだ」

「お母様のおっぱいを飲ませるの？　――でも」

それは難しいことだ。

ヘラはゼウスの浮気に関して寛大ではられない性格なのだ。浮気相手への嫉妬はもちろん、その娘から生まれてきた子どもに対しても憎しみを抱いてしまう。

例えばどんなに丁重にお願いしたところで、そんな彼女が自分の乳をアルケイデースに飲ませるなど、承知するとは思えなかった。

エリスの不安げな顔を見下ろし、ゼウスはにこりと得意げに笑った。

「ヘラが寝入っている時に吸わせてしまえばいい」

目の前に小瓶を差し出されて、エリスは思わずそれを両手で受け取ってしまう。

瓶の中で淡い朱色の液体が波打っている。

「それをヘラに飲ませておいで」

「これは？」

「眠り薬だ」

「父上」

諫めるような響きはアテナのもの。顰めた顔でゼウスを見ている。ゼウスは虫を払うかのように片手を振った。

「言うな。言うな」

「しかし、誇れた行いではありませんね」

「見逃せ」

横に唇を引いて、悪戯っ子の瞳を娘に送る。

アテナは呆れ顔を残して、父神に背を向けた。

踵を鳴らせてアテナが去ってしまうと、ゼウスはエリスの肩を軽く叩いた。

年甲斐もなくうきうきしている彼にエリスも肩を竦めて、ヘラの部屋へと足を向けた。

神殿の最奥。

水音が絶えず聞こえ、庭園を振り返ると、その中央に大きな噴水がある。

回廊を駆けていると、その途中を大男が塞いでいた。杖を突きながら、難儀そうに歩いている。

「ヘパイストスお兄様？」

ゆっくりと振り返った男は、エリスが思った通り、ヘラに忌み嫌われた長子だった。

「エリスか」

「うん。久しぶりだね。どうしたの？ お母様にご用？」

「ご相談があるのだよ」

「相談？」

小首を傾げて、ヘパイストスの隣に立つ。

彼の焦れっただくなるような歩みに合わせて、エリスは足を進めた。
コッーン、コッーン、カッン。杖の音はひどく不規則だ。

「お前は最近、アフロディテに会わなかったか？」

「アフロディテ？」

どきりとした。彼女はヘパイストスの妻でありながらアレスと浮気しているのだ。

エリスはヘパイストスから眼を逸らし、素知らぬ顔で尋ねた。

「アフロディテがどうかしたの？」

「わたしが仕事に出掛けると、嬉しそうな顔をするのだ」

「へえ」

「彼女にとってわたしの結婚は意に添わぬことだったからな。わたしの顔など見たくもないのかもしれない。仕方ないことだと分かっているが、ああもあからさまな態度をされると、落ち込むものだ」

「……」

「だが、いつか。そう、時が過ぎれば、醜いわたしにも心を開いてくれやもしれん」

「信じているんだね」

「彼女は愛の女神。きっとわたしの愛も分かってくれるはずだ」

こくり、とエリスは頷く。

——分かってくれるはず。彼女ならきっと。

そう、ヘパイストスに言ってあげたい気持ちで溢れた。

けれど、果たして彼女がヘパイストスの想いに応えてくれる日などあるのだろうか。

ヘパイストスが望み、ヘラがその願いを聞き遂げ、アフロディテに命じたから二人は結婚した。

アフロディテの気持ちなどまったく無視された結婚だったのだ。
彼女が恨みに思っていたとしても仕方がない。

エリスはヘパイストスの前に立って、入り口の布を押しやった。

13、ヘラ

ヘラの自室は、常にへべの豎琴の音が聞こえてくる。

「母上、失礼致します」

「誰だい？」

「ヘパイストスです。エリスもいます」

ヘラはまず自分を訪ねてきた幼いエリスに微笑みを浮かべ、その後ろからのっそりと現れたヘパイストスに眉を顰めた。

「まあまあエリスや、少しは大きくなったかしら？」

「さっき会ったばかりだよ、お母様」

何百年も同じ姿をしているのに、ちょっとした間に大きくなっていたら苦労はない。

両腕を広げている母神の前に立つと、エリスは頬を膨らませた。くすくすと笑い声。部屋の隅にへべが琴を抱えて座っている。妹のくせに、エリスよりもずっと女らしく、美しい。

「ねえ、へべ。葡萄酒ある？」

「あるわよ。咽が渴いているの？」

「うん」

「それなら、器を持ってきて。その机に置いてあるから」

へべの指先を見やると、銀色の机に金の器があった。二つ手にしてエリスはヘラを振り返った。

「お母様も飲むでしょう？」

「ええ、そうね。頂きましょう」

断られたら何と言って飲ませようかと思いついていたが、その必要なく事はうまくいきそうだ。

器を持ってへべの元に行くと、へべは琴を脇に置き、脇に置いてあった壺を手にした。

すると、金の器に鮮やかな紫色が広がる。あつという間に満たされ、甘い香りが辺りに漂った。

へべがもう一方の器に葡萄酒を注いでいる間、先に注がれた器の方にエリスはゼウスから預かった小瓶の中身を垂らした。そして、二つの器を持ってへらの元へと戻った。

「はい、お母様」

「ありがとう」

器を受け取ってすぐに咽を鳴らしたへらを見て、エリスはホッと息を漏らした。

「それで？」

「え？」

へらの瞳を受けて、エリスは顔を引き締める。

母神はエリスが自分を訪ねてきた理由を聞いたのだ。

まさか眠り薬を飲ませに来たとは言えない。エリスは視線を泳がせた。

「えーっと。――あつ。そうそう。へパイストスお兄様がお母様に相談があるんだって！」

「ヘパイストスが妾に？」

ジロリと冷たい眼がヘパイストスを一瞥する。

今の今まで存在を無視されていた彼は機会を得たとばかりに大きく頷き、母神の前へと歩み寄った。

「ご相談したいことがあります。アフロディテのことです」

「彼女が何か？」

口を開きかけて、ヘパイストスはヘベとエリスの方へ視線を投げた。

「二人は席を外してくれないか」

「分かりました。――エリス、行きましょう」

ヘベは琴と酒壺を手にとると、エリスに目配せを送る。

エリスにとってこの申し出は是非もない。

ヘパイストスとアフロディテのことは気になったが、エリスはヘベの背を追ってヘラの部屋を後にした。

廊下を行くとすぐにゼウスと鉢合わせになった。

彼に道を譲るため壁際寄ったヘベに対して、エリスは道の真ん中に立ち塞がり、父神が目の前にやって来るのを待った。

ゼウスもそんな愛娘を咎めるようなことはしない。眼を細めて尋ねた。

「うまくいったか？」

「うん」

「そうか。よくやった」

さっそくヘラの部屋に入ろうとしたゼウスにエリスは慌てる。

「ヘパイストスお兄様が来ているの」

「ヘパイストスが？」

怪訝そうに眉を寄せる。その時、ようやくヘベがゼウスの腕の中のものに気が付いた。

小さく声を上げる。可愛い、と。

「父上、その赤子はどうなされたのですか？」

「おお、これか？」

背を屈めて、今一番の宝である子どもをヘベに見せる。

「この子は最強の英雄になるぞ。英雄の中の英雄だ」

「まあ、素敵。父上、わたくしにも抱かせて下さい」

ヘベはゼウスから赤子を受け取ると、大切な物を抱え込むように両腕で抱いた。

ところで、と身軽になったゼウスはエリスを見下ろす。

「ヘパイストスは何をしにヘラのところにやって来たのだ？」

「相談するためよ」

「相談？」

「お兄様は、自分が留守に間にアフロディテがどう過ごしているのか気になるんですって」

「なるほど」

低く唸るように言って顎をさする。

その顔に影が差して、ヘパイストスが部屋から出てきたことを、エリスは知った。

大きな彼を仰ぎ見る。

彼は思いがけない場所でゼウスと遭遇してしまったことに驚きを隠せない顔をしていた。

「父上！」

「久しいな、ヘパイストス」

「お久しぶりです。——このようところで何をなさっておいでですか？」

「ちとヘラに用があつてな」

「母上はお疲れになられたご様子で、お休みになられてしまいました」

「ほう、寝てしまったか」

嬉しげな響きに、ヘパイストスは怪訝そうに父神を見やる。

慌ててゼウスはエリスの背を小突いた。

「ヘパイストスお兄様、あの……」

「ああ、エリス。お前のおかげでどうにかなりそうだ」

「どうにかって？」

「母上がヘリオスに、わたしが留守の間、彼女を見張るよう命じて下さるそうだ」

「そう、ヘリオスに……」

エリスは脳裏にアレスとアフロディテの顔を思い浮かべた。

彼らにこのことを知らせるべきだろうか。

アレスはエリスを味方だと思っている。だからこそ、腰帯を預けたのだろうし。

アフロディテからは鏡を受け取ってしまった。

ヘリオスが見張っていることを知っているのに言わずにいれば、恩を仇で返すことにならないだろうか。

——でも。

エリスは頭を左右に振った。

ヘパイストスはアフロディテを愛している。

そして、いつか彼女が自分を見てくれると信じている。

そんな彼のために、これ以上二人にはこそそして欲しくない。

アフロディテがヘパイストスを愛することがないのであれば、そうとはつきり彼に告げるべきだ。

そうでなければ、彼はいつまでも彼女を信じ続けてしまう。前へ進めない。

「白黒つけるのも大切なのかも……」

「わたしは灰色も好きだがな」

目を大きくして見上げると、ゼウスが口元に笑みをたたえている。

「今、私の考えを読んだの？」

「お前の場合は顔に出ているのだよ」

「読むまでもないってこと？　——あれ？　ヘパイストスお兄様は？」

「お前が頭を悩ませている間に行ってしまったよ。あれはお前のように暇ではないからね」

「私が暇なのはこの神殿から出られないからよ」

「出たいのかい？」

うつ、と言葉を詰まらせて、エリスは押し黙る。

答えないエリスを置いてゼウスはヘラの部屋に入っていた。

その腕にはへべから取り戻した赤子——アルケイデースがいる。

エリスは慌ててその後を追った。

14、ミルキーウェイ

ヘラは長椅子にゆったりと横たわっていた。
長い睫毛が、それが作った影と重なり合い、より黒を濃くしている。

零れんばかりの豊かな金髪を一房手に取ると、ゼウスは切実そうにため息を着いた。

「こうして眠っておれば美しい女なのだがな」

「お母様は眼を開けていても綺麗だよ」

「だが、きつい」

「うゝん」

エリスは眉間に皺を寄せた。

確かにきつい性格だが、優しい時は際限なく優しいのだ。

「お母様は許すことを知っているわ。だから、きつと……」

——メデューサを許せなかったアテナよりはずっと優しい。

そう言いかけて、エリスは口を閉ざした。

ゼウスの前でアテナの悪口は憚れた。

半端に途切れた言葉をゼウスはさほど気にとめず、アルケイデースを片腕に抱き直すと、ヘラの胸元に手を伸ばした。

淡い桃色の肌が晒される。

「さあ、たとと吞め」

ヘラの乳房に赤子の口を近付けさせる。

とたん、ぐびぐびと大きな音が響き渡った。

カッと見開いた瞳は、鮮やかな青。一瞬、青白い炎がそこに見えた気がした。

「痛っ！」

バチンと、ヘラの腕が鳴る。弾き飛んだ赤子は壁に背中から激突した。

「アルケイデース！」

青ざめたゼウスが赤子を追い掛け、大慌てで拾い上げる。

幸いなことに、既にヘラの乳を呑んでいたため赤子は不死であり、無事であった。

「あなた、いったい何事ですか！」

ヘラは露わになっている自身の胸を見て、激昂する。

「妾が眠っている間にその子に妾の乳をくれようとされたのですね！
なんて、なんて……っ！」

赤らんだ顔。怒った肩。握られた拳。

ヘラはゼウスを、そして赤子を睨み付けた。

「なんて汚らわしい子。人間の女の腹から生まれてきた分際で、妾の乳を吸うとは！——覚えておきましょう。今日というこの日を。その子の顔も、けして忘れません。例えその子がどこに逃れようと、

妾は必ず追いつめて、その子に苦難を与え続けるでしょう。妾の怒りが静まるまで！」

ヘラの怒鳴り声はまだ続いていたが、最後まで聞いていられずエリスは逃げ出した。

中庭を突っ切り、自分の部屋に戻る。

寝台に飛び込めば、胸がドキドキと激しく鳴っていた。

母神の怒りはエリスに向けられたものではない。

それなのに、エリスは途轍もなく母神の怒りが恐ろしかった。

そして同時に感じられた黒い暗い感情。それは、憎しみに等しい。エリスの中で何かが蠢く。

——駄目。生まれてきては、いけない！

拳で胸を強く叩きながら、エリスはギュッと瞼を閉じて、堪えた。やがて、蠢いていたものが静まる。

己を叩いていた拳を止めれば、ぞっとするくらいに辺りが静かになった。

エリスは視線を泳がせた。机の上にポツンと大きな鏡が置いてあるのが見えた。

——確か、これを覗くと運命の相手が見えるんだっけ？

アフロディテの言葉を思い出して、鏡を己の元に引き寄せる。

鏡はエリスの呼びかけに応え、机から浮くと、空を滑るようにエリスの手の中に飛んできた。

両手に持っても重たい鏡。エリスの頭ほどある。

鏡の中を覗けば、ぼんやりとしたエリスの顔がそこに映っていた。ニコリと微笑んでみる。少しだけヘラに似ている。

けれど、もつともつと似ていれば、へべのように美しいと言われただろうに。

赤みを帯びた金髪。アレスのものと同じ色だ。

——運命の相手なんて、映らないじゃない。

エリスはがっかりして、鏡を寝台の上に放った。

アポロンの黄金の馬車が西の空に沈み、アルテミスの銀の馬車が東の空を駆けた。

再び、東の空に朱色が差してきた頃、ずっと七色の橋が空を横断した。——イリスだ。

虹の女神である彼女は、ヘラの忠実な部下でもある。ヘラのご機嫌を取るために現れたのだろう。

イリスに気を取られている間にエオスがすっかり東の空を朱色に染めてしまった。

暁の女神エオスは、ヘリオスの妹であり、ヘリオスは太陽神である。

ただし、それは同じく太陽神であるアポロンが誕生する以前のことで。

今はアポロンの補佐役をしている。

アポロンがデルポイにある神殿での勤めが忙しい時は、彼に代わって黄金の馬車を走らせたりもしている。

だから、もしかすると、今日のあの馬車を走らせているのはアポロンではなくヘリオスかもしれない。

ヘリオスは神々の見張り役も務めている。

そのヘリオスがアフロディテの浮気をヘパイストスに知らせたの

は、その日の午後のことだった。

そして、事はエリスの驚く方向へと進んでいった。

ヘリオスからアフロディテの浮気を聞いたヘパイストスは、その現場を押さえようとしたのだ。

アフロディテの寝床に目には見えない網を仕掛け、ヘパイストスの留守中にもしもアフロディテがアレスと寝床に上がれば、その網が彼らを捕らえるという仕組みだ。

そして、ヘパイストスは捕られた彼らの前に他の神々を呼び、そのあわれもない姿を皆で笑いものにしようというのだ。

斯くして、ヘパイストスの網は二人を捉えた。

彼以外には解くことの出来ない網を、二人は何とか解こうとしもがき更に乱れた姿を晒した。

ポセイドンとヘルメス、ヘリオス、ヘラ、アテナが呼ばれて、ヘパイストスはアフロディテを指差して言った。

——さあ、見てくれ。嗤ってくれ。これがわたしのふしだらな妻だ。

この話を聞いて、エリスは心が重たく沈んだ。

室内に居れば更に沈みそうだったので、中庭に出て、地べたに腰を降ろした。

すると、エリスの影から声が響く。

「わたしの可愛い娘。何をそんなに落ち込んでいるのかい？」

聞き慣れた声。低く心に響いてくる。——ハデスのものだ。

「ヘパイストスお兄様は、アフロディテを愛していたはずなのに…

…」

「心を痛めるのはおやめ。愛とはそういうものなんだよ」

「そういうものって？」

ハデスの姿は見えない。声は地面から響いてくる。

「ヘパイストスはアフロディテを愛しすぎて、憎んだ。愛と憎しみは紙一重。同じだけ想いが強い」

「どういう意味？」

「愛することも憎むことも、同じだけ気力を使うってことだよ。楽しいが、むなしい。苦しいが、充実した日々を送れる。——愛は憎しみ。憎しみは愛。だからだろう。アフロディテはアレスに惹かれる。アレスは軍神だからな」

戦いを司る神——アレス。

戦争は憎しみを生む。憎しみが戦争を生んでいるのかも知れないが。

愛が憎しみと同等のものであるのなら、アフロディテがアレスに惹かれるのは必然的なことだと、ハデスと言う。

——必然？

エリスはますます分からなくなる。

「愛って、何なんだろう……？」

エリスは己の影に向かって、ため息を一つ零した。

解説 2

この物語は、ギリシア神話をもとにしたファンタジーです。

さて、ギリシア神話最大の英雄と言えば、ヘラクレスですが、「ヘラクレス」という名前は「ヘラの栄光」を意味します。

12の功業を行う際に、デルポイの巫女が彼をそう呼ぶようになり、以降、彼は「ヘラクレス」となったそうです。

よって、この物語では、しばらく「アルケイデース」と綴っています。

アルケイデースが誕生する過程は、物語にも書きましたが、なんとなくか、本当にとんでもない話です。

ゼウス、何やってんだ!!!! と。

夫だと信じたアルクメーネーが可哀想でなりません。

さらに、アルケイデースを不死にしようと、眠っているヘラの乳を勝手に吸わせたゼウスが、ありませんね！

ヘラはアルケイデースの存在自体許せないのに、何が悲しくてその子に自分の乳をやらねばならないのかと、もう！ヘラが可哀想でありません!!!!

ちなみに、目覚めたヘラが、己の乳を吸うアルケイデースを突き飛ばし、このときに飛び散ったヘラの乳が天の川になったといえます。ヘラの乳、すごいです。

話は変わって。

この物語でエリスはアポロンを「兄」と呼んでいます、神話上では、兄妹の位置関係はよく分からなかったりします。

アポロンとアルテミスが誕生するとき、ヘラはそれを邪魔しようと、彼らの母親が出産する場所を与えなかったといえます。

その際、ヘラを裏切り彼らの母親を助けようとする者はいないかどうか見晴らせたのが、ヘラの息子アレスだったとする説があります。すると、アレスはアポロンよりも年上？

エリスはアレスと双子ということにしたら、アポロンよりもエリスの方が上？ 姉？

双子の間でもどちらが上とするか、文献によっては異なる場合があります。

これは、後から生まれた方が、母親の腹の中では先に作られたから「兄」とする昔の習慣に基づいているからだと思います。

たとえば、アポロンとアルテミス。

この物語でも、アポロンを「兄」、アルテミスを「妹」としてしましますが、じつは神話では、先にアルテミスが生まれ、後から生まれてくるアポロンの誕生を助けたというエピソードがあります。

なので、文献によっては、アルテミスを「姉」として、アポロンを「弟」と書いてあるのです。

そして、もうひとつ。

兄弟の位置関係が分からなくなる3兄弟といえば、ゼウス、ハデス、ポセイドンです。

誰が長男？ 誰が末っ子だっけ？ と分からなくなったりします。というのは、文献によっては、ゼウスが長男だったり、末っ子だったりするからです。

彼らは、クロノスとレアの息子たちです。

クロノスはゼウス以前の支配者でした。

クロノスは、以前の支配者であった父親ウラノスを殺し、その座を奪い取ったため、自分も父親同様に息子に殺され支配者の座を奪われるという予言を受けます。

そこで、クロノスは妻レアが生む子ども達を次々に呑み込んでいきました。

ハデス、ポセイドン、ヘラ、ヘスティア、デメテルたちが呑み込まれ、レアは末子のゼウスだけは助けようと、ゼウスの代わりに石をクロノスに呑み込ませました。

そして、レアに匿われ成長したゼウスがクロノスを倒し、兄妹たちを救うわけなのですが、問題はここです。

ハデスやポセイドンには「ゼウスに助けられ、クロノスの腹から誕生した」という考え方があなのです。

この考えに基づくと、彼らはゼウスの弟になるわけですね。

ちなみに、ハデス、ポセイドンの順でクロノスに呑み込まれたわけなので、クロノスから出てくる順番は、ポセイドン、ハデスになるので、ハデスが末子になります。

そして、ゼウスが長男です。

けれど、この物語では、ややこしい話は横に置いておいて、ハデスが長男で、ゼウスが末子です。

さて、『天界の黯い獣』ですが、このあと、アルケイデースやテセウスの話になっていく予定です。

ですが、しばらく休載します。

2年、もしくは5年後になるかもしれませんが、気が向いた時に、

ほちほち書いていこうと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3801n/>

天界の黯い獣

2011年2月19日19時06分発行